

鳥類

1 選定・評価方法の概要

鳥類は、東京都の本土部で記録のある種の中から、個体数や生息地域が限られる種を検討対象種として合計 178 種を抽出し、これらの生息状況を精査して、ランクを判定した。判定にあたっては定量的要件を用いたが、生息状況についての把握が十分ではない種については、定性的要件により評価を行った。

鳥類は移動能力が大きいため、本来の生息地から大きく離れて移動し、偶発的に記録される迷行記録や、安定した生息とはならない不定期記録も多く存在する。このような種は「非分布」として扱った。

2 選定・評価結果の概要

評価の結果、本レッドリストの掲載種は合計で 162 種となり、前回のリストと比較して大幅な増加となった。これは、環境省基準の採用により、定量的なデータを精査した結果によることもあるが、開発や土地利用の変化も要因と考えられる。一方、データの精査の結果、主要な生息地でないといった理由により「非分布」として除外された種もある。

また、絶滅した鳥類の判定には困難が伴った。日本国内全般において、明治期に狩猟のため大型鳥類が大きく減少し、東京地域についてもトキやコウノトリ、ツル類やハクガンなどの生息が消失したと思われる。しかし、これらの記録の精査は困難であるため、日本野鳥の会 (1975) による「東京の鳥 - 東京都産鳥類目録 -」の記載を元に、1930 年代以降に定常的な生息がなくなった種とした。繁殖していた種については、繁殖の記録消失によって絶滅とした。

現時点では絶滅のおそれはないが、特定の生息地への集中が強いスズガモ、カンムリカイツブリについては、環境条件の変化により生息状況が急変する可能性があるため、注意喚起のため留意種とした。

絶滅危惧 (CR、EN、VU) と判定された種を目別に見ると、チドリ目が 41 種と最も多いほか、カイツブリ目やサギ目、ツル目 (クイナ科) といった干潟や湿地を生息環境とする鳥類が多い。また、キジ目の鳥やスズメ目内でも、オオヨシキリやオオジュリンなど湿性草地 (ヨシ原)、ヒバリやモズなど草地性の鳥が多く含まれ、湿地や草地環境の減少や悪化が、絶滅のおそれを増大させていることを示唆している。

タカ目、フクロウ目の捕食性鳥類が合わせて 21 種となったことは、食物となる生物が全体的に減少していることを示唆している。

スズメ目の中では、国外から渡ってくる夏鳥が 20 種も含まれる。都内の生息環境の変化だけでなく、越冬地や中継地の環境変化などの影響を受けている可能性がある。

地域別にみると、区部が絶滅のおそれの高い種がもっとも多い。開発が進み、鳥類の生息環境条件の悪化が大きく進行しているといえる。特に湾岸部の干潟や湿地に生息する鳥類が本リストに多く挙げられた。1970 年代に埋立てが進行し、1980 年代から 1990 年代前半には埋立地が自然湿地の代替機能をもっていたが、その後土地利用が進み、現在、野鳥の生息地は東京港野鳥公園や葛西海浜公園などごく一部に限られる。内陸部も畑や未利用地が減り、宅地化や都市化が進んで緑地が減少している。北多摩地域も区部に続き宅地化や都市化が進行し、緑地が減少している。南多摩地域は、丘陵地が多く比較的良好な鳥類生息環境が残っている地域だが、宅地化は進行している。西多摩地域は山地帯が多く、リストには山林性の種が多い。三多摩地域は水鳥の生息地となっている多摩川を含むため、シギ・チドリ類がリストに多く含まれる結果となった。

絶滅のおそれをもたらししている原因としては、特に湿地や草地環境が失われるなど生息環境の

減少および悪化が主要なものと考えられる。

(金井 裕)

ウズラ

Coturnix japonica

キジ目
キジ科



【形態・生態】

体長 20 cm。小さくて体が丸く、尾は短い。雄成鳥夏羽は顔から脇が赤褐色。白っぽい頭中央線と眉斑がある。平地から低山帯の草原に生息し、地表で植物の種子や小型の果実、昆虫類やクモ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州（中部以北）では夏鳥。本州（中部以南）、四国、九州、南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

海岸の埋立地や河川敷の広大な草地で見られたが、近年は観察記録がほとんどない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸の埋立地や河川敷の広大な草地の減少、また、こうした繁殖場所となる草地への人・犬・猫・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。また、コリンウズラや飼育ウズラの放鳥により、生息場所の競合や遺伝子のかく乱を生じるおそれがある。繁殖期にウズラの生息が確認された場合には、必要に応じて草地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ヤマドリ

Syrnaticus soemmerringii

キジ目
キジ科



【形態・生態】

体長雄 125 cm、雌 55 cm。雄成鳥は尾が非常に長くて目立ち、体全体は赤褐色。丘陵地から山地の樹林に生息し、木の根元や岩陰などの地上に営巣する。地表で植物の種子や昆虫類、土壌動物などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

南多摩西部や西多摩の丘陵地や山地の林内で見られるが、個体数は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息地である樹林の減少や分断のほか、林床のササ類の過密化などが、本種の生存を脅かす要因である。また、狩猟鳥の放鳥事業による遺伝子のかく乱や、犬・猫・アライグマなどにより卵や雛が捕食される可能性がある。生息場所として、ササ類が過密化していない樹林を保全することが望ましい。狩猟鳥の放鳥事業を行う場合、放鳥個体は都内の個体群を増殖させたものを用いるなど留意する必要がある。また、必要に応じて犬・猫・アライグマなどの増加を防止する対策を講じることが望ましい。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 木村成生, 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



キジ

Phasianus colchicus

キジ目
キジ科



【形態・生態】

体長雄 80 cm、雌 60 cm。雄成鳥は顔は皮膚が裸出して赤く、胸、腹は緑色光沢がある。平地や山地の草地、耕作地、河原などに生息し、地表で植物の種子や昆虫類、クモ類、土壌動物などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

河川敷、平地や丘陵地の耕作地、造成地の草地に生息する。草丈の高い草地が多い公園でも見られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

農地や丘陵地の宅地化や、採草地の放棄による樹林化に伴う草地環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。また、狩猟鳥の放鳥事業による遺伝子のかく乱や、犬・猫・アライグマなどにより卵や雛が捕食されることも大きな要因であると考えられる。生息場所となる草地環境を可能な限り保全することが望ましい。狩猟鳥の放鳥事業を行う場合、放鳥個体は都内の個体群を増殖させたものを用いるなど留意する必要がある。また、必要に応じて犬・猫・アライグマなどの増加を防止する対策を講じることが望ましい。

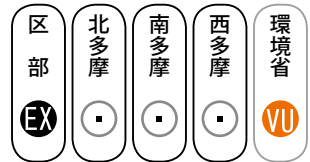
【関連文献】

小宮真治, 1988; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ヒシクイ

*Anser fabalis*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 85 cm。成鳥の上面は暗褐色で、体下面と上・下尾筒は白く、尾は黒色。嘴は黒く、先が橙色で、先端が黒い。湖沼、池、水田、湿地などに生息し、植物の葉、茎、根、種子、果実などを食べる。

【分布の概要】

北海道では旅鳥。本州では冬鳥。

【都における生息環境】

以前は東京でも越冬していたが、現在は広い河川敷で稀に見られるだけである。関東での越冬数は増加傾向にあり、東京への飛来も増える可能性がある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

広大な水田地帯や干潟、河川敷の湿地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現在、稀に渡来する河川では、水際から後背地の草地まで可能な限り広く保全することが望ましい。

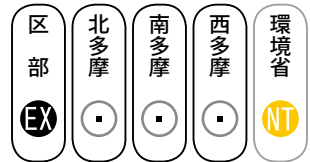
【関連文献】

日本野鳥の会東京支部, 2006; 世田谷の鳥編集委員会(編), 2009.

(執筆: 金井裕)



マガン

*Anser albifrons*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 72 cm。成鳥の上面は暗褐色で胸から腹は白く、黒色横斑がある。嘴は桃橙色で、基部周辺は白い。湖沼、水田、池、湿地に生息し、植物の葉、茎、根、種子、果実などを食べる。

【分布の概要】

北海道では旅鳥。本州では冬鳥。

【都における生息環境】

以前は東京でも越冬していたが、現在は広い河川敷で稀に見られるだけである。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

広大な水田地帯や干潟、河川敷の湿地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現在、稀に渡来する河川では、水際から後背地の草地まで可能な限り広く保全することが望ましい。

【関連文献】

廣田行雄, 2006.

(執筆: 金井裕)



オシドリ

*Aix galericulata*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 45 cm。後頭に冠羽があり、頸に栗色の筋状の羽がある。胸は紫色で、側胸に 2 本の白線がある。山地溪流から湖沼、池などに生息し、樹洞で繁殖する。草の種子、果実、水生昆虫などを食べるが、特に堅果を好む。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州、四国、九州では留鳥または漂鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

公園や丘陵地、山地などのシヤカシなどの樹木に囲まれた水辺で見られる。冬は都心部の池に生息するが、近年は減少傾向にある。

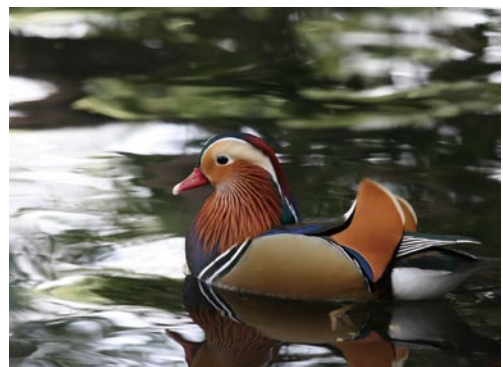
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

人・犬による生息地のかく乱、猫などによる捕食、水辺のシヤカシなどの伐採による食物資源の減少が、本種の生存を脅かす要因である。営巣地が特定された場合には周辺一帯の環境を保全することや、必要に応じて人為的かく乱を抑制するため、注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

八王子・日野カワセミ会, 2006; 川内博, 2007; 鈴木君子, 2007.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ヨシガモ

*Anas falcata*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 48 cm。雄成鳥は額から後頭と眼先から頬線にかけて赤紫色で、眼から後頭にかけては緑色光沢がある。湖沼、池、河川、内湾などに生息する。河川や公園の池で休息し、水際の草地で種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道では少数が夏鳥。本州、四国、九州では冬鳥。

【都における生息環境】

河川や公園の池などで少数が見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

内陸性カモ類共通の要因として、採食地となる草地環境や河川の湿性草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。また、写真撮影などの人為的ストレスによるかく乱も生じる可能性がある。採食地となる草地や湿地を可能な限り保全することや、必要に応じて観察者への注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

八王子・日野カワセミ会, 2006; 日本野鳥の会東京支部, 2008.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

アメリカヒドリ

*Anas americana*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 48 cm。雄成鳥は額から頭頂が淡い黄白色で、頬には黒斑が密にある。胸から脇は薄紫色で、下尾筒は黒い。湖沼、池、河川、内湾などに生息し、水際の草地で種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で冬鳥。

【都における生息環境】

河川や公園の池で見られるが、非常に少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

内陸性カモ類共通の要因として、採食地となる草地環境や河川の湿性草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。また、写真撮影などの人為的ストレスによるかく乱も生じる可能性がある。採食地となる草地や湿地を可能な限り保全することや、必要に応じて観察者への注意喚起を行うことが望ましい。

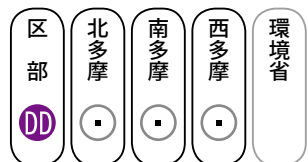
【関連文献】

津戸英守, 1984; 「野鳥と多摩川」制作委員会(編), 1992; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

シマアジ

*Anas querquedula*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 38 cm。雄成鳥は頭頂が黒く、後頸まで伸びる太く白い眉斑がある。胸は褐色地に黒い鱗状斑がある。湖沼、池、河川、水田、干潟などに生息し、水際の草地で種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

河川や湖沼、公園の池で稀に見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

内陸性カモ類共通の要因として、採食地となる草地環境や河川の湿性草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。また、写真撮影などの人為的ストレスによるかく乱も生じる可能性がある。採食地となる草地や湿地を可能な限り保全することや、必要に応じて観察者への注意喚起を行うことが望ましい。

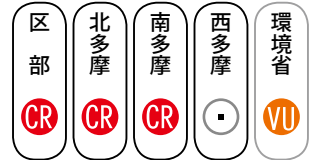
【関連文献】

桑原和之, 2000; 世田谷の鳥編集委員会(編), 2009.



(執筆: 金井裕)

トモエガモ

*Anas formosa*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 40 cm。雄成鳥の顔の様子は、黄白色と緑色、黒色の巴形をしている。背の上面は褐色で、下尾筒は黒く、白い横線がある。湖沼、池、河川などに生息し、水際の草地で種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道では旅鳥。本州、四国、九州では冬鳥。

【都における生息環境】

河川や公園などの池で見られるが、渡来数は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

内陸性カモ類共通の要因として、採食地となる草地環境や河川の湿性草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。また、関東では渡来数が少ないため、写真撮影など的人為的ストレスによるかく乱も生じる可能性がある。採食地となる草地や湿地を可能な限り保全することや、必要に応じて観察者への注意喚起を行うことが望ましい。

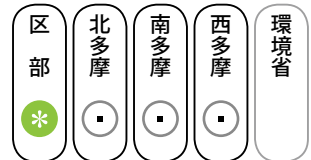
【関連文献】

八王子・日野カワセミ会, 2006; 日本野鳥の会東京支部, 2008.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

スズガモ

*Aythya marila*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 45 cm。雄成鳥は頭部から胸、上・下尾筒、尾が黒く、頭部には緑や紫の光沢がある。背には細かく黒い波状斑がある。河口、内湾、港などに生息する。潜水してアサリなどの貝類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【都における生息環境】

主に海岸付近や河口で見られる。葛西沖は数千から数万羽が集中する大規模な越冬地である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸周辺の埋立てによる生息場所の減少や、生息水域に船が通行することによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。生息水域を可能な限り保全することが望ましい。なお、集団越冬地では、船舶の事故による油の流出や伝染病の発生などにより、個体群全体へ大きな影響を及ぼす可能性があることに留意する必要がある。

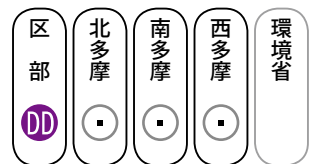
【関連文献】

東京都公書局, 1975.



(執筆: 金井裕)

ビロードキンクロ

*Melanitta fusca*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 55 cm。雄成鳥は全体が黒く、眼の下に白い三日月斑がある。嘴は赤色で、先端からまわりが黄色。上嘴基部は黒色のこぶがある。沿岸や沖合などに生息し、潜水して主に貝類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【都における生息環境】

海上で見られるが、東京湾の海上調査がほとんど行われていないため、生息状況は不明である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸付近を除き、東京湾での生息状況が不明であるため、東京湾の海上調査を行い、海面の鳥類の生息状況把握が望まれる。

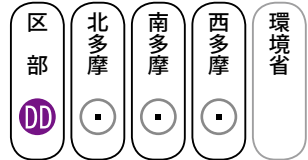
【関連文献】

桑原和之, 2000; 世田谷の鳥編集委員会 (編), 2009.



(執筆: 金井裕)

クログアモ

*Melanitta americana*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 48 cm。雄成鳥は全身が黒く、嘴も黒いが、上嘴の基部はこぶ状に膨らんでいて黄色い。沿岸、沖合、内湾、港などに生息し、貝類、甲殻類、昆虫類、魚類の卵などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【都における生息環境】

海上で見られるが、東京湾の海上調査がほとんど行われていないため、生息状況は不明である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸付近を除き、東京湾での生息状況が不明であるため、東京湾の海上調査を行い、海面の鳥類の生息状況把握が望まれる。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004; 日本野鳥の会東京支部, 2007.



(執筆: 金井裕)

ホオジロガモ

*Bucephala clangula*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 45 cm。雄成鳥は頭部が緑色光沢のある黒色で、嘴基部に白斑がある。背面と上・下尾筒は黒く、尾は灰黒色。河口、内湾、沿岸、湖沼、河川などに生息し、潜水して甲殻類やイカ類、貝類などの軟体動物を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【都における生息環境】

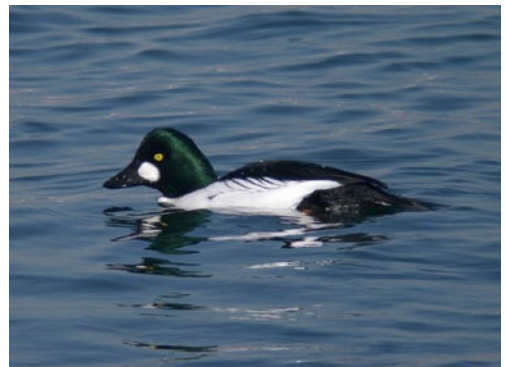
海岸付近や河川、大きな湖沼など、比較的開放的な水面で、少数見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸周辺の埋立てによる生息場所の減少や、生息水域に船が通行することによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。生息水域を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

荻野豊, 1980; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

ミコアイサ

*Mergellus albellus*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 42 cm。雄成鳥は全体が白く、眼のまわりから眼先、後頭、側胸の2本線、背、肩羽などが黒い。湖沼、池、河川などに生息し、魚類、カエル類、昆虫類、甲殻類、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【都における生息環境】

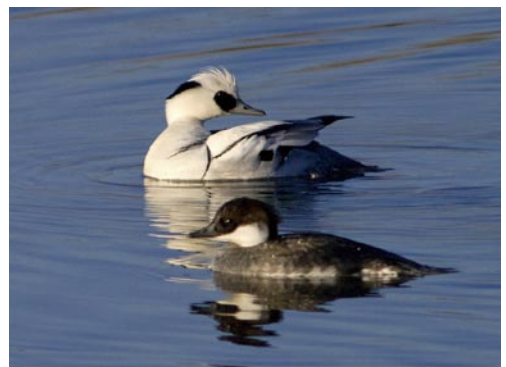
比較的開けた水面を好み、以前は河川や湖沼で群れが見られたが、近年は少数が見られるだけになった。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ブラックバスの増加や水質の悪化、河川改修などによる食物となる小魚の減少や、写真撮影などの人為的ストレスによるかく乱などが、本種の生存を脅かす要因である。生息場所では食物資源の保全に極力努めることや、人為的かく乱を抑制するため、必要に応じて観察者などへの注意喚起を行うことが望ましい。

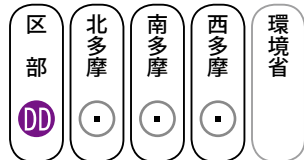
【関連文献】

津戸英守, 1984; 「野鳥と多摩川」制作委員会(編), 1992; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

ウミアイサ

*Mergus serrator*カモ目
カモ科

【形態・生態】

体長 55 cm。雄成鳥は頭部が緑色光沢のある黒色で、後頭に冠羽がある。胸は茶褐色で黒色斑がある。背は黒く、腹は白色。沿岸、河口、内湾などに生息するが、稀に海岸近くの池沼に入ることもある。潜水して魚類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【都における生息環境】

沿岸や河口の広い水域で見られるが、河口部や海上での調査がほとんど行われていないため、生息状況は不明である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸周辺の埋立てによる生息場所の減少や、生息水域に船が通行することによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。生息水域を可能な限り保全することが望ましい。海岸付近を除き、東京湾での生息状況が不明であるため、東京湾の海上調査を行い、海面の鳥類の生息状況把握が望まれる。

【関連文献】

東京都公書局, 1975.

(執筆: 金井裕)



カイツブリ ※備考 (p.376)

*Tachybaptus ruficollis*カイツブリ目
カイツブリ科

【形態・生態】

体長 26 cm。日本産カイツブリ科では最小で、翼・尾が短い。池、湖沼、河川などに生息し、主に開けた水面周辺の水草やヨシに水草を積み重ねて巣を作る。水中に潜って魚類、甲殻類、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州、四国、九州、南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

河川の水たまりや流れの緩やかな水域、堰の湛水域、河道跡の池沼、海岸、公園、団地の池など、山地を除く東京都本土部に広く見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水生植物の減少による営巣環境の減少、ブラックバスの増加や水質悪化などによる食物となる小魚などの減少、人・犬・ミシシippアカミミガメなどによる繁殖活動のかく乱などにより、繁殖個体が減少している。水生植物の保全や食物資源の回復、営巣が確認された場所では、必要に応じて観察者などへの注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 鈴木君子, 2007.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



アカエリカイツブリ

*Podiceps grisegena*カイツブリ目
カイツブリ科

【形態・生態】

体長 47 cm。頭は三角形で首が長く、嘴は黄色で先が黒い。繁殖期に近づくと首が赤くなる。冬は沿岸に生息し、湖沼や池、河川などにも見られる。水中に潜って魚類、甲殻類、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州では冬鳥。北海道では夏鳥。

【都における生息環境】

主に沿岸域や大河川の河口付近に見られるが、湖沼や河川の堰の湛水域など、比較的面積が広く、見通しの良い水域でも少数が見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海域での船舶の航行や、河川敷や湖岸での人・犬の通行が、生息場所のかく乱要因となっている可能性がある。必要に応じて、生息場所への人・犬の接近について注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

府中野鳥クラブ(編), 2003; 赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

(執筆: 金井裕・川内博)



カムリカイツブリ

*Podiceps cristatus*カイツブリ目
カイツブリ科

【形態・生態】

体長 56 cm。日本産カイツブリ科では最大。首は特に長く白色で、嘴はピンク色。湖沼、池、河川、河口、海岸などの広い水域に生息する。水中に潜って魚類、甲殻類、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州では冬鳥。本州の一部（青森、秋田、琵琶湖など）では繁殖。

【都における生息環境】

主に海上や河口部の広い水域や、一部の湖沼に生息する。大河川の堰の湛水域など比較的面積が広く、見通しの良い水域でも稀に見られる。葛西沖は数百から数千羽が集中する高密度の越冬場所となっている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

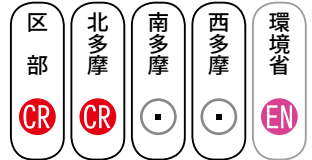
海域での船舶の航行や、河川敷や湖岸での人・犬の通行が、生息場所のかく乱要因となっている可能性がある。必要に応じて生息場所への人・犬の接近について注意喚起を行うことが望ましい。なお集団越冬地では、船舶事故による油汚染や伝染病などの発生により個体群全体へ大きな影響を及ぼす可能性があることに留意する必要がある。

【関連文献】

池谷文夫, 1990; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 日本野鳥の会東京支部, 2007. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



シラコバト

*Streptopelia decaocto*ハト目
ハト科

【形態・生態】

体長 32.5 cm。キジバトより小さくて細く、尾は長い。成鳥は全体に淡灰褐色だが、翼はやや色が濃い。屋敷林、雑木林、耕作地などに生息し、植物の種子や果実、穀物などを食べる。

【分布の概要】

本州（埼玉、千葉、茨城、栃木の平野部に局地的）で留鳥。

【都における生息環境】

農地や草地、公園などの中に樹木が点在するような環境に生息する。埼玉県や千葉県との都県境付近に生息が記録されていたが、最近では確認されていない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

宅地化や都市化による、生息場所となる農地や草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。生息していた地域では、隣接他県も含め耕作地や草地がほとんど消失しており、生息環境の回復は困難な状況となっている。

【関連文献】

埼玉県教育委員会, 1982; 小荷田行男ら, 2011.

(執筆: 金井裕・川内博)



アオバト

*Treron sieboldii*ハト目
ハト科

【形態・生態】

体長 33 cm。雄成鳥は額と喉から胸にかけて黄緑色で、頭頂からの背面は緑灰色。体下面は淡黄白色。丘陵地から山地の樹林に生息し、植物の種子や果実などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州では留鳥。

【都における生息環境】

西多摩、南多摩の山地や丘陵地の林内に生息し、繁殖している。冬や春・秋の移動の時期には、都市部の公園でも見られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

完全な樹林性の鳥で、開発などによる伐採や植林による広葉樹主体の樹林の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の樹林環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくことが望ましい。また、繁殖や採食など生態行動に不明な点が多いため、情報の蓄積が望まれる。

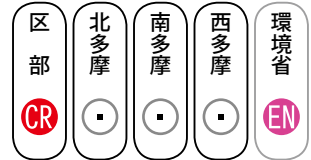
【関連文献】

小宮真治, 1991; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 御手洗望ら, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



サンカノゴイ

*Botaurus stellaris*ペリカン目
サギ科

【形態・生態】

体長 70 cm。ずんぐりした体形の大型のサギ類。体色はバフ色地に黒褐色の頭頂線と頸線、背面に縦斑がある。湿地、湖沼、河川の湿性草地に生息する。魚類や甲殻類、カエル類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州、四国、九州では冬鳥。本州の一部（茨城、千葉、滋賀）では繁殖。

【都における生息環境】

海岸の埋立地や河川のヨシやガマが生育する湿性草地で見られる。東京都本土部での確認個体数は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や植生遷移の進行、アレチウリの繁茂などによる、ヨシやガマが生育する広大な湿地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。河川改修などの際にはヨシやガマが生育する湿地環境を可能な限り保全することや、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。

【関連文献】

佐藤方博・増永望美, 2009; 世田谷の鳥編集委員会 (編), 2009.

(執筆: 金井裕)



ヨシゴイ

*Ixobrychus sinensis*ペリカン目
サギ科

【形態・生態】

体長 36.5 cm。サギ類の中では最小。背面は茶褐色で、飛ぶと黒褐色の風切や初列雨覆が目立つ。湖沼、河川のヨシなどが生育する湿地とその周辺に生息し、繁殖する。魚類やカエル類、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

海岸の埋立地や河川のヨシやガマが生育する草地で見られる。渡りの時期には、公園の池などでも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や植生遷移の進行、アレチウリの繁茂などによる、ヨシやガマが生育する湿地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。河川改修などの際にはヨシやガマが生育する湿地環境を可能な限り保全することや、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。

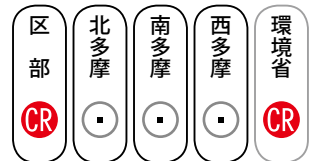
【関連文献】

東京都環境保全局, 1997. 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オオヨシゴイ

*Ixobrychus eurhythmus*ペリカン目
サギ科

【形態・生態】

体長 39 cm。頭部から背面が濃い栗色で雨覆は黄灰色。体下面は白く、喉の中央に縦斑がある。上嘴は黒く、下嘴は橙黄色。ヨシやガマの湿性草地に生息し、魚類やカエル類、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州（中部以北）で夏鳥。

【都における生息環境】

海岸の埋立地や河川のヨシやガマが生育する草地で見られる。継続した生息確認のある場所はほとんどない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や植生遷移の進行、アレチウリの繁茂などによる、ヨシやガマが生育する広大な湿地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。河川改修などの際にはヨシやガマが生育する湿地環境を可能な限り保全することや、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1975.

(執筆: 金井裕)



ミゾゴイ

Gorsachius goisagi

ペリカン目
サギ科



【形態・生態】

体長 39 cm。頭部は栗色で、暗褐色の背面や雨覆に、細かい淡色斑がある。嘴は黒い。低山の樹林に生息し、樹上で営巣する。夕方から夜間にポオウポオウと鳴く。サワガニやミミスズ類、爬虫類などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州では夏鳥。九州では少数が越冬。

【都における生息環境】

西多摩の丘陵地の雑木林や低山地の薄暗い樹林で少数が見られる。渡りの時期には、市街地の公園などでも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林の伐採に伴う樹林面積の縮小が、本種の生存を脅かす要因である。また、生息地での写真撮影による人為的ストレスも、かく乱要因となっていると考えられる。まとまった面積のある樹林を保全することや、営巣地が確認された場合には、静かに見守ることが大切であり、必要に応じて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

川名国男, 2006a; 川名国男, 2006b; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ササゴイ

Butorides striata

ペリカン目
サギ科



【形態・生態】

体長 52 cm。頭は青みのある黒色で、長い冠羽がある。嘴は黒い。背面から雨覆は、青みのある黒褐色で下面は青灰色、喉には白の縦線がある。河川、湖沼、水田、池の水際で、魚類やカエル類、昆虫類などを食べる。営巣は単独や少数で樹木上で行う。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

採食地である河川や公園などの池で見られるが、個体数は少ない。稀に小河川でも見られる。営巣は人やカラス類によるかく乱の少ない樹林で行われる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

かく乱の少ない採食地と営巣樹木の減少が、本種の生存を脅かす要因である。また、生息地での写真撮影による人為的ストレスもかく乱要因となっていると考えられる。採食地と営巣樹木がセットで存在する環境の保全とともに、営巣が確認された場合には、静かに見守ることが大切であり、必要に応じて人為的かく乱を防ぐために注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都環境保全局, 1997; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ダイサギ ※備考 (p.376)

Ardea alba

ペリカン目
サギ科



【形態・生態】

体長 90 cm。全身が白い。夏羽は嘴が黒く、胸や背に長い飾り羽がある。冬羽は嘴が黄色くなる。水田、湿地、河川、湖沼、池、河口、干潟などの浅い水域で採食し、人やカラス類によるかく乱の少ない樹林で集団で営巣する。魚類や甲殻類、カエル類、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

本州では漂鳥。四国、九州では留鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

山間部を除く河川、水路、湖沼、池、干潟などで周年見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

埋立てによる干潟など浅い水域の減少、河川改修、水田の減少による採食地の減少や、営巣場所における人・カラス類によるかく乱の増加が、本種の生存を脅かす要因である。採食地となる水域を可能な限り保全することや、営巣地では必要に応じて人為的かく乱を抑制するための注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



チュウサギ

Egretta intermedia

ペリカン目
サギ科



【形態・生態】

体長 68.5 cm。全身が白い。夏羽の嘴は黒色で胸や背に飾り羽がある。冬羽は嘴が黄色くなる。草地、水田、湿地、湖沼、河川などに生息し、水田地帯では、他のサギ類と一緒に、樹林に集団で営巣し、休息する。昆虫類やクモ類、魚類などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州では夏鳥または漂鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

渡りの時期に河川や干潟、湿地、公園の池、水田などの浅い水域に飛来するが、長く滞在することはなく、渡り途中の通過と推定される。かつては他のサギ類とともに多数繁殖していたが、近年は繁殖記録はない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

埋立てによる干潟など浅い水域の減少、河川改修、水田の減少による採食地の減少や、営巣場所における人・カラス類によるかく乱の増加が、本種の生存を脅かす要因である。採食地となる水域を可能な限り保全することや、営巣が確認された場合には、必要に応じて人為的かく乱を抑制するための注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

羽村市郷土博物館(編), 1992; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



コサギ ※備考 (p.376)

Egretta garzetta

ペリカン目
サギ科



【形態・生態】

体長 61 cm。全身が白色で足指の黄色が目立つ。夏羽は後頭と背や胸に長い飾り羽が出る。水田、河川、湖沼、干潟など浅い水辺で採食し、人やカラスによるかく乱の少ない樹林に集団で営巣し、休息する。魚類やカエル類、甲殻類や昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州では留鳥または漂鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

海岸、河川、水路、湖沼、池など、山間部を除く広い範囲で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

採食地となる浅い水域の減少、ブラックバスの増加や水質悪化などによる小魚などの食物資源の減少、営巣場所における人・カラス類によるかく乱の増加が、本種の生存を脅かす要因である。採食地となる浅い水域を可能な限り保全することや、食物資源の回復を図ることが望まれる。また、営巣が確認された場合には、必要に応じて観察者などへの注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

瑞穂町教育委員会, 1994; 東京都環境保全局, 1997. 八王子・日野カワセミ会, 2006.

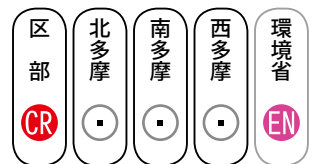
(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



クロツラヘラサギ

Platalea minor

ペリカン目
トキ科



【形態・生態】

体長 73.5 cm。全身が白く、嘴と足が黒い。嘴から額、眼先の皮膚の裸出部は黒く、嘴は長く、へら状をしている。干潟、水田、湿地、河川、湖沼などに生息し、昆虫類や甲殻類、魚類などを食べる。海岸の砂洲や防波堤で休息する。

【分布の概要】

九州、南西諸島で冬鳥。

【都における生息環境】

干潟環境が残っている場所で見られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

干潟の減少に伴う採食場所の減少、釣り人などによる休息場所のかく乱などが、本種の生存を脅かす要因である。現存する干潟の保全や、必要に応じて釣り人への注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

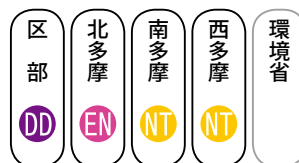


(執筆: 金井裕)

クイナ

Rallus aquaticus

ツル目
クイナ科



【形態・生態】

体長 29 cm。成鳥は額から尾までの上面は茶褐色で、顔から胸にかけては青灰色。平地から低山地の河川、湖沼、湿地などに生息し、植物の種子や昆虫類、カエル類、小魚などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州（関東北部以北）では漂鳥または留鳥。本州（関東南部以南）、四国、九州、南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

海岸の埋立地や河川のヨシやガマが生育する湿地に少数渡来し越冬する。近年やや増加傾向にある。

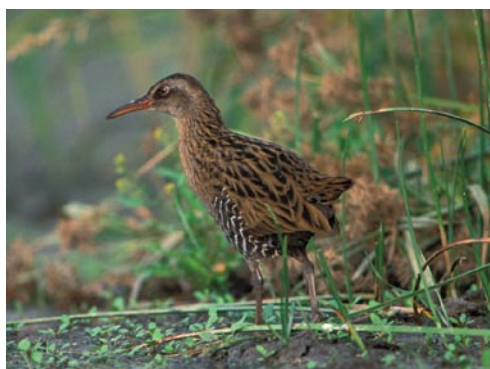
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ヨシやガマが生育する湿地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。警戒心が強く、身を潜めるための湿地は本種にとって重要な環境である。現存する生息地を可能な限り保全することに加え、ヨシやガマが生育する湿地環境を創出していくことが望ましい。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ヒクイナ

Porzana fusca

ツル目
クイナ科



【形態・生態】

体長 22.5 cm。成鳥は額や顔、腹が赤褐色で、頭頂から尾までの上面は暗緑褐色。平地から低山地の河川、湖沼、湿地などに生息し、植物の種子や昆虫類、カエル類、小魚などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

海岸の埋立地や河川のヨシやガマが生育する湿地に生息する。以前は繁殖もしていたが、近年は一時的に観察されるだけである。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ヨシやガマが生育する湿地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。警戒心が強く、身を潜めるための湿地は本種にとって重要な環境である。現存する生息地を可能な限り保全することに加え、ヨシやガマが生育する湿地環境を創出していくことが望ましい。

【関連文献】

松尾武重ら, 1990; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 高橋喜代治, 2009.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



バン

Gallinula chloropus

ツル目
クイナ科



【形態・生態】

体長 32.5 cm。成鳥は全体に黒色だが、脇には白い縦斑がある。額板と嘴は赤く、嘴の先は黄色い。湖沼、池、河川、湿地に生息し、植物の種子や昆虫類、貝類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州（東北）では夏鳥。本州（関東以南）、四国、九州、南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

河川の河道跡などの池沼や堰の湛水域、公園や住宅団地の池など、水際にヨシやガマが生育する水辺で広く見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水際部の改修などによるヨシやガマが生育する湿地の減少や、水質の悪化に伴う食物となる生物の減少、ブラックバスなどの増加によるふ化直後の捕食などが、本種の生存を脅かす要因である。生息地では、営巣場所となるヨシやガマの生育する湿地の保全や、水質の改善による食物資源の回復を図ることが望ましい。

【関連文献】

「野鳥と多摩川」制作委員会(編), 1992; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 清水徹男, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オオバン ※備考 (p.376)

Fulica atra

ツル目
クイナ科



【形態・生態】

体長 39 cm。成鳥は全身が黒く、嘴と額板は白い。主にヨシなどが生育する湖沼、池、河川、水田などに生息し、水草の葉、茎、種子や昆虫類、貝類、甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州（東北北部）では夏鳥。本州（東北南部以南）、四国、九州では留鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

沿岸域の穏やかな海上、河川敷の池沼、堰の湛水域やダム湖、公園の池など、水際にヨシやガマが生育する比較的開放的な水域で見られる。近年は繁殖期には記録が少ないが、越冬数は増加している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水際部の改修などによるヨシやガマが生育する湿地の減少や、水質の悪化に伴う食物となる生物の減少、ブラックバスなどの増加によるふ化直後の捕食などが、本種の生存を脅かす要因である。生息地では、営巣場所となるヨシやガマの生育する湿地の保全や、水質の改善による食物資源の回復を図ることが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 府中野鳥クラブ (編), 2009. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

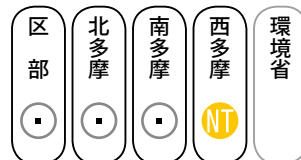


鳥
類

ジュウイチ

Hierococyx hyperythrus

カッコウ目
カッコウ科



【形態・生態】

体長 32 cm。成鳥は頭部から背、翼は灰黒色で、胸から腹は淡橙褐色。尾は灰色で数本の黒帯がある。日本産カッコウ類では最も標高の高い山地にまで生息し、ツグミ科の鳥を宿主とする。主に昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩の樹林に生息し、繁殖している。東京都本土部での宿主については確認できていない。春・秋の渡りの時期は、都市部の公園などの樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

オオルリ・コルリ・ルリビタキ・コマドリなど、山地の樹林に生息する宿主となる鳥の減少が、本種の生存を脅かす要因である。これらの鳥が主に生息する標高 1,000 m 以上の樹林環境を可能な限り保全することや、渡りの時期には、公園の樹林などで採食することがあるため、薬剤散布を控えることが望ましい。

【関連文献】

東京都環境保全局, 1997; 御手洗望ら, 2006.

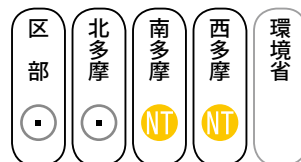
(執筆: 金井裕・川内博)



ホトトギス

Cuculus poliocephalus

カッコウ目
カッコウ科



【形態・生態】

体長 27.5 cm。成鳥は頭部から背、上尾筒、胸は暗青灰色で、翼と尾は黒褐色。腹は白く、黒色横斑がある。平地から亜高山帯の樹林に生息し、主に昆虫類を食べる。主な宿主はウグイスである。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で夏鳥。

【都における生息環境】

山地から丘陵地、平地の樹林に生息し、繁殖していて、宿主はウグイスと考えられる。春・秋の渡りの時期は、公園などの樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

林床にササが茂る樹林に生息する宿主のウグイスの減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の樹林を可能な限り保全することや、渡りの時期には、公園の樹林などで採食することがあるため、薬剤散布を控えることが望ましい。

【関連文献】

吉良幸世, 1994; 瑞穂町教育委員会, 1994; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ツツドリ

Cuculus optatus

カッコウ目
カッコウ科



【形態・生態】

体長 32.5 cm。成鳥は頭部から背、上尾筒、胸は青灰色で、翼と尾は黒褐色。腹は白く、黒色横斑がある。宿主は低山から亜高山帯に生息するムシクイ類。樹林に生息し、主に昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩、南多摩の山地から丘陵地の樹林に生息し、繁殖している。東京都本土部での宿主についての知見はほとんどない。春・秋の渡りの時期は、都市部の公園などの樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

宿主となるセンダイムシクイ・メボソムシクイなど樹林に生息するムシクイ類の減少が、本種の生存を脅かす要因である。これらの鳥が主に生息する広葉樹林を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくこと、また、渡りの時期には、公園の樹林などで採食することがあるため、薬剤散布を控えることが望ましい。

【関連文献】

東京都環境保全局, 1997; 清水徹男, 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



カッコウ

Cuculus canorus

カッコウ目
カッコウ科



【形態・生態】

体長 35 cm。成鳥は頭部から背、上尾筒、胸は青灰色で、翼と尾は黒褐色。体下面は白く、細い黒色横斑がある。林縁や草原などの開けた環境を好み、様々な鳥を宿主とする。主に昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩、南多摩、北多摩の丘陵地から平地一帯、河川敷などの樹林や草地に生息し、少数が繁殖をしている。東京都本土部での宿主についての知見はほとんどないがホオジロ、オオヨシキリ、モズ、オナガなどの可能性がある。春・秋の渡りの時期は、都市部の公園などの樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林や草地に生息する宿主となる種の減少が、本種の生存を脅かす要因である。これらの鳥が主に生息する河川敷のヨシ原や耕作地の草地、疎林を可能な限り保全することや、渡りの時期には、公園の樹林などで採食することがあるため、薬剤散布を控えることが望ましい。

【関連文献】

瑞穂町教育委員会, 1994; 清水徹男, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ヨタカ

Caprimulgus indicus

ヨタカ目
ヨタカ科



【形態・生態】

体長 29 cm。成鳥は全身がほぼ黒褐色で、灰白色、茶褐色などの複雑な虫食い斑がある。平地から山地の樹林と草地が混在する場所に生息し、飛翔性昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

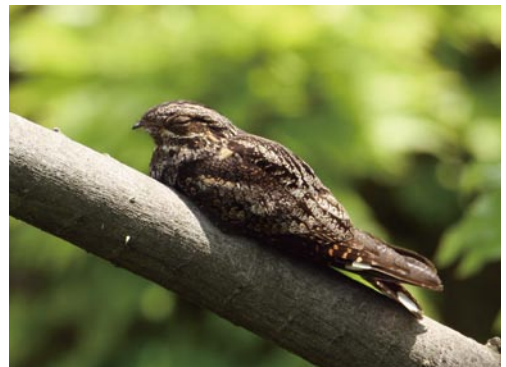
多摩地域の丘陵地や山地に生息する。渡りの時期には、都市部の公園の樹木で見られることがある。かつては山地で普通に生息していたが、個体数の減少が著しい。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

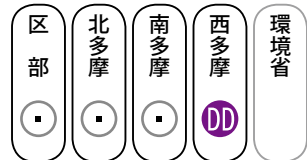
開発や植林により、広葉樹林や林縁の草地、低木が減少し、営巣環境や食物となる飛翔性昆虫類の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林に転換していくことが望ましい。

【関連文献】

吉良幸世, 1994; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



アマツバメ

*Apus pacificus*アマツバメ目
アマツバメ科

【形態・生態】

体長 20 cm。成鳥は体の大部分が黒色で、腰が白い。翼は細長く鎌形。海岸から高山帯まで生息し、飛翔性昆虫類を食べる。山地の断崖や海岸の岸壁の亀裂などに営巣する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島（北部）で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩では繁殖期に生息が確認されるので、岩場で営巣していると考えられる。春・秋の渡りの時期には上空を群れて飛ぶ姿が見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

植林による広葉樹林の減少で、食物となる飛翔性昆虫類が減少したことなどが脅威として挙げられるが、確実な営巣地の近況が不明であるため、詳細な生息状況の把握が望まれる。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997.



(執筆: 金井裕・川内博)

ヒメアマツバメ ※備考 (p.376)

*Apus nipalensis*アマツバメ目
アマツバメ科

【形態・生態】

体長 13 cm。成鳥は体の大部分が黒色で、喉から頸と腰が白く翼は鎌形。主に平地から低山地の開けた場所に生息し、飛翔性昆虫類を食べる。コンクリートの建築物などで営巣する。イワツバメの巣を利用することが多い。

【分布の概要】

本州（関東南部以西）、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

1987年ごろから、南多摩の鉄道高架下のイワツバメのコロニーに集団で定着するなど、イワツバメの分布拡大とともに生息地を広げ、沿岸域でも見られる。近年、都心部の高層ビルの最上階でも営巣している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発に伴う緑地の減少による飛翔性昆虫類の減少や、建築物の建て替えに伴う集団営巣地の消失、糞を嫌っての住民による巣の撤去などが、本種の生存を脅かす要因である。営巣分布については不明点が多く、今後情報の蓄積が望まれる。

【関連文献】

山根茂生, 1988; 川内博, 1998; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



タゲリ

*Vanellus vanellus*チドリ目
チドリ科

【形態・生態】

体長 31.5 cm。雄成鳥冬羽は額から頭頂が黒褐色で、後頭に黒色の長い冠羽がある。耕作地、河川、草地、干潟などに生息し、昆虫類や甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島で冬鳥。

【都における生息環境】

主に春・秋の渡りの時期に、河川敷の泥地や浅瀬、水田で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息場所となる河川敷のスゲ類が生育する湿地や泥地、水田や畑地などの草丈の低い草地の減少や、生息場所への人の立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地を可能な限り保全することや、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。埼玉県など近隣の地域では普通に越冬しており、環境を整備すれば定着する可能性があるため、生息環境の創出も望まれる。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ケリ

Vanellus cinereus

チドリ目
チドリ科



【形態・生態】

体長 35.5 cm。成鳥夏羽は頭部から上胸が青灰色で、胸に黒色帯がある。上尾筒から尾は白く、先端は黒い。水田、畑、河原、草地などに生息し、植物の種子や昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島で冬鳥。本州(近畿以北から関東)で局地的に繁殖。

【都における生息環境】

河川敷の泥地や河原、海岸の干潟、水田で見られるが、稀である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川敷の湿地や泥地、水田や畑地などの草丈の低い草地の減少や、人の立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地を可能な限り保全することや、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。埼玉県など近隣の地域では普通に越冬しており、環境を整備すれば定着する可能性があるため、生息環境の創出も望まれる。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ムナグロ

Pluvialis fulva

チドリ目
チドリ科



【形態・生態】

体長 24 cm。成鳥夏羽は顔から喉、腹までの黒色部が目立つ。背面は黄色、黄褐色、黒色などのまだら模様。干潟、水田、埋立地などに生息し、内陸部に多い。昆虫類や甲殻類、ゴカイ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。本州(中部以南)、四国、九州、南西諸島では少数が越冬。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に海岸や河口の干潟や河川敷などで見られる。満潮時に護岸の上や人がいない駐車場などでも休息する。

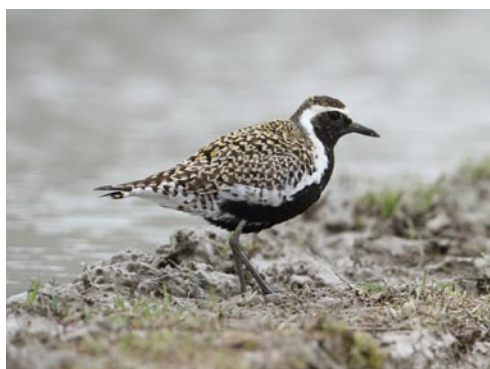
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や内陸部の湿地の減少、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ダイゼン

Pluvialis squatarola

チドリ目
チドリ科



【形態・生態】

体長 29.5 cm。成鳥夏羽では顔から喉、腹までが黒色部。上面と尾は白黒のまだら模様。嘴と足は黒い。海岸や河口の干潟などに生息し、昆虫類、甲殻類、ゴカイ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。本州(中部以南)、四国、九州、南西諸島では少数が越冬。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に海岸や河口の干潟や河川敷などで見られる。満潮時には護岸の上や人がいない駐車場などでも休息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



イカルチドリ

Charadrius placidus

チドリ目
チドリ科



【形態・生態】

体長 20.5 cm。成鳥夏羽はコチドリに似るが、嘴と足は長く、過眼線やアイリングは色が薄い。砂礫地がある河川、湖沼、池、水田などに生息し、河川中・上流域の砂礫河原で営巣する。主に昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥または漂鳥。

【都における生息環境】

主に河川中流域の砂礫河原で見られる。造成地においても砂礫河原と同じような環境で見られることがある。多摩川中・上流域で繁殖している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ダム建設などにより河川流量が安定化したことで、砂礫河原の冠水頻度（出水頻度）が低下し、草地へと遷移することによる生息環境の減少、生息場所への人・犬などの立入りによるかく乱などが、本種の生存を脅かす要因である。出水が少ない年には整地を行うなど砂礫河原を維持することや、繁殖が確認された場合には、必要に応じて立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



鳥類

コチドリ

※備考 (p.376)

Charadrius dubius

チドリ目
チドリ科



【形態・生態】

体長 16 cm。成鳥夏羽は前頭の黒色と頭頂の褐色の間に白色部があり、黄色いアイリングがある。河川敷、海岸の砂洲、造成地などの草の少ない砂礫地で繁殖する。主に小型のカニや底生動物、昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

海岸や河口の干潟、河川敷の河原、造成地の裸地、休耕田などで見られる。埋立地や河川敷などで繁殖している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

干潟や裸地の減少と生息地への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地を可能な限り保全することや、埋立地や河川敷に干潟や裸地を創出すること、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 清水徹男, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



シロチドリ

Charadrius alexandrinus

チドリ目
チドリ科



【形態・生態】

体長 17.5 cm。雄成鳥夏羽は額から眉斑が白く、前頭と過眼線は黒い。海岸の砂洲や河川の中洲などの裸地で営巣する。昆虫類、甲殻類、ゴカイ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で留鳥または漂鳥。

【都における生息環境】

以前は埋立地の砂地で多数営巣していたが、極端に減少し、近年は海岸線や埋立地でごく少数が繁殖をしている。春・秋の渡りの時期に見られる個体数も減少した。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営巣環境である砂地の干潟や河川敷などの裸地の減少、営巣地への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、営巣環境を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

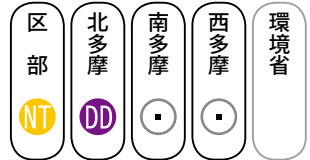
(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



メダイチドリ

Charadrius mongolus

チドリ目
チドリ科



【形態・生態】

体長 19.5 cm。成鳥夏羽では前頭から眉斑、側頸、胸にかけて橙赤褐色。飛翔時は白い翼帯があり、伸ばした足は尾とほぼ同じ長さ。干潟、砂浜、河口、河川などに生息し、甲殻類やゴカイ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、海岸や河口の干潟や河川の砂洲や泥地などで見られる。満潮時には護岸の上や人がいない駐車場などでも休息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

「野鳥と多摩川」制作委員会(編), 1992; 府中野鳥クラブ(編), 2003.

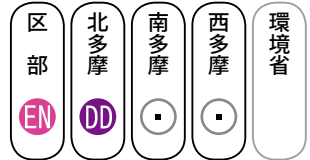
(執筆: 金井裕・川内博)



ミヤコドリ

Haematopus ostralegus

チドリ目
ミヤコドリ科



【形態・生態】

体長 45 cm。成鳥は頭部から胸、背からの上面は黒く、側胸から体下面は白い。飛翔時は白い翼帯が目立つ。夏羽では嘴、足、虹彩とも赤い。海岸、干潟、河口などに生息し、主に貝類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥または冬鳥。

【都における生息環境】

海岸や河口の礫浜、干潟、河原などで見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸の埋立てや護岸工事、河川改修などによる干潟や砂浜などの減少や、満潮時の休息場所への釣り人・車の立入りによるかく乱などが、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地を可能な限り保全することや、必要に応じて満潮時の休息場所への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。また、海岸や河川敷に浅瀬を創出する際には、コンクリートの垂直護岸ではなく、大石を配置した近自然護岸とすることで、保全効果が期待される。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004; 杉本秀樹, 2009.

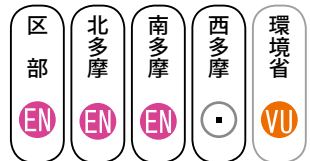
(執筆: 金井裕・川内博)



セイタカシギ

Himantopus himantopus

チドリ目
セイタカシギ科



【形態・生態】

体長 32 cm。足と嘴が長い。雄成鳥夏羽は頭頂から後頸が黒く、上面は緑色光沢のある黒色で、その他は白い。干潟、河口、湖沼、河川などに生息し、昆虫類や甲殻類、小魚などを食べる。

【分布の概要】

本州では夏鳥または旅鳥。北海道、四国、九州、南西諸島では旅鳥。

【都における生息環境】

埋立地の裸地で営巣していると考えられ、巣立ち後の家族は、海岸の干潟で見られる。渡りの時期は、河川敷でも見られる。

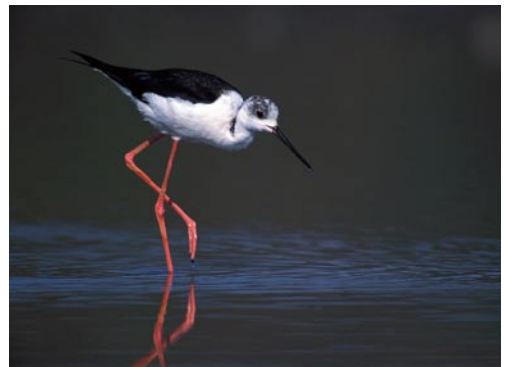
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営巣環境となる干潟に近い場所の泥地や裸地は、埋立工事中から終了後間もない期間しか成立しないため、繁殖活動は埋立工事に依存している状況である。埋立工事中の地域では、工事による営巣環境のかく乱が生じるおそれがある。営巣が確認された場合には、工事などでかく乱が生じないように配慮することが望ましい。

【関連文献】

川内博, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 岩崎正義, 2009.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ヤマシギ

*Scolopax rusticola*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 34 cm。比較的大きく太ったシギで、眼は頭頂近くにある。過眼線は黒褐色で明瞭。平地から低山地の樹林、耕作地、河川敷などに生息し、昆虫類やミミズ類、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州では漂鳥。四国、九州、南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

公園の樹林、海岸、河川敷、丘陵地から低山地の樹林やオギ・ススキの草地、耕作地などで少数が見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

護岸整備や宅地開発などによる明るい樹林や草地の減少、生息場所への人・犬の立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地を可能な限り保全することや、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

清水徹男, 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

アオシギ

*Gallinago solitaria*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 30 cm。上面は黒褐色と褐色、白色の模様が細かく複雑にある。体下面は白い。溪流、山間部の河川、湿地などに生息し、昆虫類やミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で冬鳥。

【都における生息環境】

奥多摩の溪流で見られるが少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渡来数そのものが少なく、現状の生息実態が把握されておらず不明な点が多いため、詳細調査を実施して実態を明らかにすることが望まれる。

【関連文献】

東京都公書局, 1975.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

オオジシギ

*Gallinago hardwickii*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 30 cm。嘴は長く、先端は黒い。頭央線、眉斑、顔、喉は淡黄白色で、頭側線や過眼線は黒い。耕作地や湿地などに生息し、昆虫類やミミズ類、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州(北部の草原、中部の高原)では夏鳥。四国、九州、南西諸島では旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、海岸や河口の干潟など、草丈の低い湿性草地で見られる。近年減少が著しい。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や湿性草地の減少、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や湿性草地などの環境を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

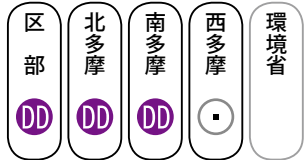


(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

チュウジシギ

Gallinago megala

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 27 cm。姿、形はオオジシギと酷似しているが、春はバフ色みが強く、秋は暗色に見える。飛翔時、翼先はオオジシギより丸みがある。耕作地や湿地に生息し、昆虫類やミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、海岸や河口の干潟などの草丈の低い湿性草地で稀に見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や湿性草地の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や湿性草地などの環境を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



タシギ

Gallinago gallinago

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 27 cm。非常に長い嘴を持つ。頭部は黒色の頭側線、過眼線、頬の線と、淡黄白色の頭中央線、眉斑のコントラストが目立つ。干潟や河川、水田などに生息し、昆虫類や甲殻類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では旅鳥。本州、四国、九州、南西諸島では旅鳥または冬鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期および冬に、ヨシ・ガマやスゲ類が生育する海岸や河川敷、丘陵地の谷戸、水田などの湿地で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、宅地開発、河川改修などによる湿性草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、湿性草地や泥地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

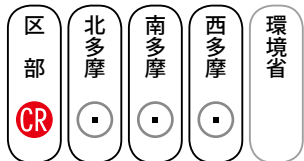
(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オオハシシギ

Limnodromus scolopaceus

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 29 cm。成鳥夏羽は顔から体下面にかけての赤褐色が目立ち、胸から脇は黒褐色の横斑がある。水田、ハス田、ため池、干潟、河口などに生息し、昆虫類や甲殻類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

海岸の干潟や河川の泥地などで見られるが、稀である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸や河口における埋立て、浚渫、護岸整備などによる干潟や泥地の減少や、写真撮影などの人為的ストレスなどによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地を可能な限り保全することや、干潟や泥地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への人の立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

(執筆: 金井裕)



オグロシギ

Limosa limosa

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 38.5 cm。嘴はまっすぐで長く、足も長い。雄成鳥夏羽は頭部から胸が赤褐色で、頭頂から後頸に黒い縦斑がある。干潟、河川、水田などに生息し、昆虫類や甲殻類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に海岸や河口の干潟や河川の浅瀬、泥地で見られる。満潮時には護岸や人のいない駐車場などでも休息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や泥地の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や泥地、裸地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

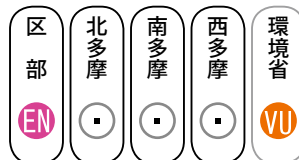


鳥
類

オオソリハシシギ

Limosa lapponica

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 41 cm。嘴は長くてやや上に反り、雄成鳥夏羽は頭頂からの上面は黒褐色の軸斑に赤褐色の羽縁があり、翼に白い斑がある。干潟、河口、海岸、水田などに生息し、昆虫類や甲殻類、小魚などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に海岸や河口の干潟や河川の浅瀬、泥地で見られる。満潮時には護岸や人のいない駐車場などでも休息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や泥地の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や泥地、裸地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004. (執筆: 金井裕)



チュウシャクシギ

Numenius phaeopus

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 42 cm。成鳥は眉斑と頭中央線が白く、上面は褐色で淡色の羽縁がある。体下面は白く、脇から下尾筒にかけて褐色横斑がある。干潟、砂浜、河川などに生息し、昆虫類や甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では旅鳥。南西諸島では旅鳥または冬鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に海岸や河口の干潟や河川の浅瀬、泥地、草地で見られる。中小河川の水際で見られることもある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や泥地の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や泥地、裸地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

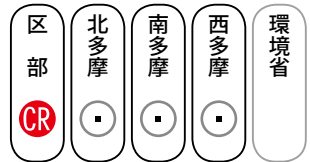
津戸英守, 1984; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ダイシャクシギ

Numenius arquata

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 60 cm。嘴が長くて、下へ大きく湾曲している。成鳥冬羽は、上面は黒褐色で胸から脇に黒褐色の縦斑があり、腹から下尾筒までは白い。干潟、河口、砂浜などに生息し、昆虫類や貝類、甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では旅鳥。本州、四国、九州、南西諸島では旅鳥または冬鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に海岸や河口の干潟や河川の浅瀬、泥地で見られる。近年、個体数の減少が著しい。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や泥地の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や泥地、裸地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

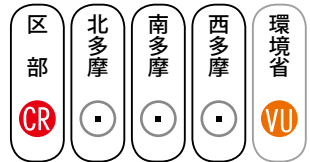
(執筆: 金井裕)



ハウロクシギ

Numenius madagascariensis

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 61.5 cm。嘴は下へ大きく湾曲している。成鳥は全体に褐色みが強く、顔から腹にかけて黒褐色の縦斑が密にある。干潟、河口、砂浜などに生息し、甲殻類やゴカイ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では旅鳥。本州、四国、九州、南西諸島では旅鳥または冬鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に海岸や河口の広い干潟や河川の浅瀬、泥地で見られる。近年、個体数の減少が著しい。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や泥地の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や泥地、裸地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

(執筆: 金井裕)



ツルシギ

Tringa erythropus

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 32.5 cm。成鳥夏羽は全体にすすけた黒色で、上面の白い羽縁は斑点や切れ込みみだら状になっている。海岸、干潟、水田、湿地などに生息し、昆虫類や甲殻類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

以前は埋立地や河川のスゲ類が生育する湿地や泥地で見られたが、近年はほとんど見られない。全国的に減少が著しい。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境である埋立地や河川の泥地、水田などの湿地環境が減少しており、個体数も減少している。現存する生息地を可能な限り保全することや、河川敷や埋立地、公園などに生息に適した湿地環境を創出していくことが望ましい。

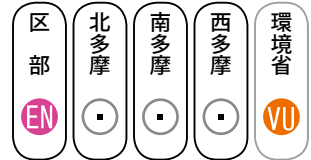
【関連文献】

津戸英守, 1984; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



アカアシシギ

*Tringa totanus*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 27.5 cm。成鳥夏羽は頭部からの上面が灰褐色で、黒褐色の縦斑が密にあり、体下面は白地に黒褐色の縦斑が目立つ。干潟、河口、湿地などに生息し、昆虫類や甲殻類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。北海道の一部で局地的に営巣。

【都における生息環境】

以前は埋立地や河川のスゲ類が生育する湿地や泥地で見られたが、近年はほとんど見られない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境である埋立地や河川の泥地、水田などの湿地環境が減少しており、個体数も減少している。現存する生息地を可能な限り保全することや、河川敷や埋立地、公園などに生息に適した湿地環境を創出していくことが望ましい。

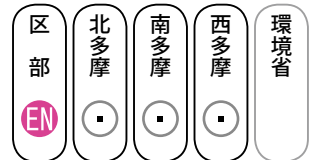
【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004; 世田谷の鳥編集委員会 (編), 2009.

(執筆: 金井裕)



コアアシシギ

*Tringa stagnatilis*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 24.5 cm。成鳥夏羽は頭部から胸までが淡青灰色で、黒斑が密にある。上面は灰褐色で、白い羽縁と黒斑がある。河川、池沼、水田、湿地などに生息し、昆虫類や甲殻類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、海岸の干潟や河川の泥地で少数見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や泥地の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

桑原和之, 2000; 赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

(執筆: 金井裕)



アオアシシギ

*Tringa nebularia*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 35 cm。成鳥夏羽は頭部から胸が灰褐色で、黒褐色の縦斑が密にある。嘴は黒くてやや上に反り、基部が淡色。干潟、河口、水田、河川などに生息し、昆虫類や甲殻類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、海岸の干潟や河川の泥地で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

府中野鳥クラブ (編), 2003; 赤羽根文男・鈴木弘行, 2004; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



クサシギ

Tringa ochropus

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 24 cm。成鳥夏羽は頭部から胸にかけて白地に黒褐色の縦斑が密にあり、背の上面は黒褐色。干潟、河口、河川、湖沼、湿地などに生息し、昆虫類や甲殻類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では旅鳥。本州、四国、九州、南西諸島では旅鳥または冬鳥。

【都における生息環境】

大河川中流域の浅瀬や泥地、低地から丘陵地の中小河川の河原など、草本類が生育する湿地で見られる。近年、個体数の減少が著しい。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修などによる水際に草本類が生育する河川敷の湿地や泥地の減少、生息地への人・犬・車の立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地を可能な限り保全することや、こうした湿地環境を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 清水徹男, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



タカブシギ

Tringa glareola

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 21.5 cm。成鳥夏羽では頭部から胸は白地に褐色縦斑が密で、特に頭頂は濃い。眉斑は白く、過眼線は黒褐色。干潟、河口、河川、水田、湿地などに生息し、昆虫類や甲殻類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

海岸の干潟や河川中流域の浅瀬や泥地で見られる。近年、個体数の減少が著しい。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や泥地の減少や、生息地への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、草本類がまばらに生育する干潟や泥地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 清水徹男, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



キアシシギ

Heteroscelus brevipes

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 25 cm。成鳥夏羽の上面は一律な灰褐色で体下面は白い。嘴は黒く、下嘴基部は淡黄色。足は黄色い。干潟、河口、岩場、河川などに生息し、昆虫類や甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、海岸や河口の干潟や河川の浅瀬、泥地で見られる。礫の多い水辺も好み、石積護岸も利用する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や泥地の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や泥地、裸地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 清水徹男, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ソリハシシギ

*Xenus cinereus*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 23 cm。成鳥夏羽は頭部からの上面が灰褐色で、黒い軸斑がある。嘴は長めで黒く、上に反っており、基部は淡橙色。干潟、河口、海岸、河川などに生息し、昆虫類や甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、海岸や河口の干潟や河川の浅瀬、泥地で見られる。満潮時には護岸や人のいない駐車場などでも休息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟や泥地の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や泥地、裸地を創出していくこと、また、必要に応じて、生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 府中野鳥クラブ(編), 2003.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



イソシギ

*Actitis hypoleucos*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 20 cm。成鳥の顔と胸は灰褐色で、喉と下胸からの体下面は白い。河川、湖沼、海岸、干潟などに生息し、昆虫類や甲殻類などを食べる。海岸の砂洲や河川の中州などの草地で営巣する。

【分布の概要】

北海道、本州(東北北部)では夏鳥。本州(東北南部以南)、四国、九州では留鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

海岸や河川敷に広く生息し、中小河川でも見られる。近年は個体数の減少が著しい。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営巣環境である低茎草本がまばらに生育する草地環境の減少や、営巣地への人の立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存の生息環境を可能な限り保全することや、営巣に適した草地環境を創出していくこと、また、必要に応じて営巣地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



キョウジョシギ

*Arenaria interpres*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 22 cm。雄成鳥夏羽では頭部から胸が特徴的な白黒模様。頭頂には黒色と褐色の縦斑がある。海岸や河口の干潟などに生息し、浅い水域で昆虫類や甲殻類、貝類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、海岸や河口の干潟や河川敷の礫の多い水辺で見られるが少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟の減少や、満潮時の休息場所となる人のいない駐車場などの裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、生息環境を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 「野鳥と多摩川」制作委員会(編), 1992; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

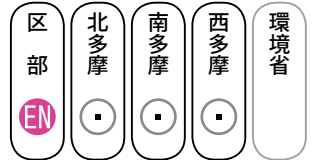
(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オバシギ

Calidris tenuirostris

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 28.5 cm。成鳥夏羽は頭部から胸にかけて白地に黒褐色の縦斑が目立ち、特に胸は黒斑が密で黒帯のように見える。干潟、河口、海岸の岩場や砂浜などに生息し、昆虫類や甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に海岸や河川の干潟や泥地などで少数が見られるだけである。満潮時には護岸の上や人がいない駐車場などでも休息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

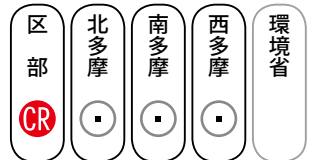
(執筆: 金井裕)



コオバシギ

Calidris canutus

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 24.5 cm。成鳥夏羽は顔から腹までが鮮やかな赤橙褐色で、下腹部から下尾筒は白く、黒色斑がある。干潟、河口、砂浜などに生息し、ゴカイ類や貝類、甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

海岸や河口部の干潟、河川中流域の泥地で見られるが個体数は少ない。満潮時には護岸の上や人がいない駐車場などでも休息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

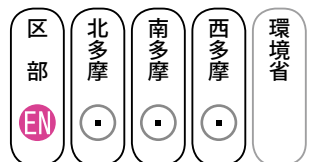
(執筆: 金井裕)



ミユビシギ

Calidris alba

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 19 cm。成鳥夏羽は頭部から胸は赤褐色で、黒褐色の縦斑がある。背の上面も赤褐色で軸斑は黒い。嘴基部周辺は白く、嘴は黒くて短い。砂地の干潟や浜辺などに生息し、昆虫類や甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では旅鳥。本州、四国、九州、南西諸島では旅鳥または冬鳥。

【都における生息環境】

以前は飛来数は少なかったが、近年、海岸の砂地の干潟や浜辺でよく見られるようになった。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息場所となる砂地の干潟や浜辺の減少や、生息地への人・車の立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、砂地の干潟や浜辺を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

(執筆: 金井裕)



トウネン

*Calidris ruficollis*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 15 cm。成鳥夏羽は頭部から顔、胸までは赤褐色で、頭頂から後頸には黒褐色の縦斑がある。干潟、河口、河川、水田などに生息し、ゴカイ類、甲殻類、昆虫類、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

以前は埋立地の砂地や泥地で数多く見られたが、近年は春・秋の渡りの時期に海岸や河口の干潟や泥地などで少数見られるだけである。満潮時には護岸の上や人がいない駐車場などでも休息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オジロトウネン

*Calidris temminckii*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 14.5 cm。成鳥夏羽は頭部からの上面が灰褐色で、胸は淡黄褐色に黒褐色の縦斑がある。干潟、水田、湿地、河川、池沼などに生息し、昆虫類や甲殻類、貝類、ミミズ類やゴカイ類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥または冬鳥。

【都における生息環境】

海岸や河口部の干潟、河川中流域の泥地で見られるが、個体数は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟の減少や、満潮時の休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ヒバリシギ

*Calidris subminuta*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 14.5 cm。成鳥夏羽では頭頂から上面の軸斑が黒く、羽縁は茶褐色で、羽先は白い。喉と下胸からの体下面は白い。水田、湿地、埋立地などの淡水湿地に生息し、昆虫類や甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、主に河川中流域の泥地や浅瀬の水際で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境である泥地や水田など、内陸部の湿地環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、必要に応じて、こうした湿地環境を創出していくことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ウズラシギ

Calidris acuminata

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 21.5 cm。成鳥夏羽は頭頂が茶色。顔、後頭部、背、胸は橙褐色みを帯び、黒褐色の縦斑が密にある。干潟、水田、ハス田などの泥湿地に生息し、昆虫類や甲殻類、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、河川中流域の泥地や浅瀬の水際で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息環境である泥地や水田など、内陸部の湿地環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する渡来地の環境を可能な限り保全することや生息に適した湿地環境を創出していくことが望ましい。

【関連文献】

府中野鳥クラブ(編), 2003; 赤羽根文男・鈴木弘行, 2004; 世田谷の鳥編集委員会(編), 2009.

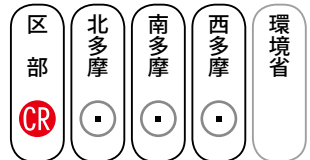


(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

サルハマシギ

Calidris ferruginea

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 21.5 cm。成鳥夏羽は頭部から胸、腹にかけて鮮やかな赤褐色が目立つ。嘴基部の額と喉がわずかに白い。干潟、河口、砂浜などに生息し、ゴカイ類や貝類、甲殻類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

海岸や河口部の干潟、河川中流域の泥地で見られるが個体数は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004; 世田谷の鳥編集委員会(編), 2009.



(執筆: 金井裕)

ハマシギ

Calidris alpina

チドリ目
シギ科



【形態・生態】

体長 21 cm。成鳥夏羽は顔から胸は白く、黒褐色の縦斑がある。嘴は黒く、先がわずかに下へ曲がっている。干潟、砂浜、埋立地などに生息し、昆虫類や甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では旅鳥。本州、四国、九州、南西諸島では旅鳥または冬鳥。

【都における生息環境】

海岸や河口部、河川中流域などの比較的広い干潟や泥地・河原で見られる。以前は河川や干潟に多く渡来していたが、近年は干潟で少数の群れが見られるのみとなっている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息場所となる面積の広い干潟や泥地、河原の減少や、満潮時の休息場所となる裸地への人・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、広い干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

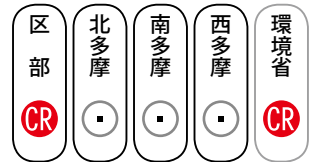
【関連文献】

津戸英守, 1984; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

ヘラシギ

*Eurynorhynchus pygmeus*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 15 cm。成鳥夏羽は頭部から胸までが赤褐色で、頭頂に黒褐色の縦斑がある。嘴はへら状で黒い。干潟、砂浜、埋立地などに生息し、昆虫類、甲殻類、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

海岸や河口部の干潟などで見られるが、稀である。世界的に個体数が極めて少ない種である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸や河口における埋立て、浚渫、護岸整備などによる干潟や泥地の減少や、写真撮影などの人為的ストレスなどによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や泥地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

日本野鳥の会東京支部, 2003.

(執筆: 金井裕)



キリアイ

*Limicola falcinellus*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 17 cm。頭側線がすぐ上の白線と眉斑に挟まれている。成鳥夏羽は顔から胸、脇にかけては黒褐色の縦斑がある。干潟、河口、砂浜などに生息し、昆虫類、貝類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に海岸や河口の干潟などで見られる。近年は個体数の減少が著しい。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

桑原和之, 2000; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



エリマキシギ

*Philomachus pugnax*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長雄 32 cm、雌 25 cm。雄成鳥夏羽は羽色に変異が多く、様々な模様の個体がいる。水田、湿地、干潟、河口などに生息し、昆虫類や甲殻類、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、海岸や河口の干潟、河川敷の泥地などで見られる。近年は個体数の減少が著しい。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

浚渫、埋立て、護岸整備、河川改修などによる干潟の減少や、休息地となる裸地環境への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、干潟や裸地を創出していくこと、また、必要に応じて生息地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

鈴木弘行, 1994; 府中野鳥クラブ(編), 2003.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



アカエリヒレアシシギ

*Phalaropus lobatus*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 19 cm。冬羽は上面が灰色で、体下面は白い。眼のまわりと後方に黒斑がある。嘴と足は黒く、嘴は細くまっすぐ。沿岸、河川、水田、湖沼などに生息し、甲殻類や貝類、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、沿岸の海上や河川で見られるが、海上を主な生息地としているため、生息状況はよくわかっていない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息状況に不明な点が多いため、海上調査を実施して、生息状況を把握することが望まれる。

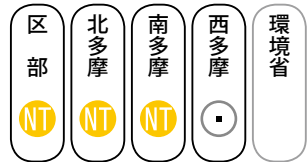
【関連文献】

津戸英守, 1984; 府中野鳥クラブ(編), 2003.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

ハイロヒレアシシギ

*Phalaropus fulicarius*チドリ目
シギ科

【形態・生態】

体長 22 cm。成鳥夏羽は非常に美しい。雄は雌に比べて全体に色が淡く、嘴の黒色部が多い。飛翔時は白い翼帯が出る。海岸や海上に生息し、甲殻類や貝類、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で旅鳥。

【都における生息環境】

春・秋の渡りの時期に、沿岸の海上や河口で見られるが、海上を主な生息地としているため、生息状況はよくわかっていない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息状況に不明な点が多いため、海上調査を実施して、生息状況を把握することが望まれる。

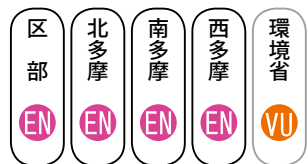
【関連文献】

赤羽根文男・鈴木弘行, 2004.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

タマシギ

*Rostratula benghalensis*チドリ目
タマシギ科

【形態・生態】

体長 23.5 cm。雌雄とも頭中央線は黄褐色。胸から側胸にかけて白線があり、背の黄褐色の線につながっている。水田、湿地、休耕田などに生息し、植物の種子や昆虫類、ミミズ類、貝類、甲殻類などを食べる。

【分布の概要】

本州では留鳥または漂鳥。四国、九州、南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

海岸の埋立地や河川敷など、草丈の低いスゲ類などが生育する湿性草地や泥地で見られる。近年の確認記録は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息場所となる草丈の低い湿性草地や泥地、水田の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地を可能な限り保全することや、河川敷や公園の池などにこうした湿地環境を創出していくことが望ましい。

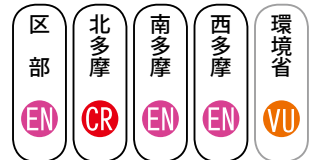
【関連文献】

東京都公書局, 1980; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

コアジサシ

*Sterna albifrons*チドリ目
カモメ科

【形態・生態】

体長 28 cm。成鳥夏羽は頭頂から後頭が過眼線とつながり黒い。体下面にかけては白い。河口、河川、湖沼などの河原や砂州などに生息し、魚類を食べる。海岸の砂洲や河川の中州などの裸地で営巣する。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島で夏鳥。

【都における生息環境】

海岸や河川、池沼で採食しているのがよく見られる。海岸の埋立地に裸地が広がっていた頃は各地で多数営巣し、東京都本土部の公園の池にも飛来していた。現在は埋立地の裸地が減少し、営巣環境は極めて限られている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営巣地となる裸地の減少、営巣地への釣り人などの立入りによるかく乱、カラス類による卵や雛の捕食などが、本種の生存を脅かす要因である。現存の生息地を可能な限り保全することや、必要に応じて、営巣地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

渡部良樹, 1997; 増田直也, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ミサゴ

*Pandion haliaetus*タカ目
ミサゴ科

【形態・生態】

体長雄 54 cm、雌 64 cm。頭頂は白く、後頭に短い冠羽があり、黒褐色の太い過眼線がある。成鳥は上面がほぼ一様に黒褐色で、下面は白。海岸付近や内陸の河川、湖沼に生息し、魚類を捕食する。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州では留鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

冬は海岸周辺の湿地に少数生息し、稀に内陸部の湖沼にも出現する。渡りの時期には通過個体が見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質の悪化による食物(魚類)の視認性の低下や、食物となる魚類の減少、採食地となる水域での船舶の航行などによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。食物となる魚類の個体数の増加を図るとともに、良好な採食地を増やすため、水質の改善を図ることが望ましい。

【関連文献】

池谷文夫, 1990; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ハチクマ

*Pernis ptilorhynchus*タカ目
タカ科

【形態・生態】

体長雄 57 cm、雌 60.5 cm。上面は暗褐色であるが、体下面は白色の淡色型から黒褐色の暗色型のあいだで段階的に様々。丘陵地から低山地の樹林で繁殖する。スズメバチ類の幼虫や蛹を好むが、両生・爬虫類なども食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

丘陵地や低山地で見られるが、確認は極めて少ない。また、春と秋には渡りの途中と思われる個体が、主に山地で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

スズメバチ類や両生・爬虫類などが豊富な、丘陵地から低山地の谷戸と樹林がセットになった環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。こうした環境を保全することや、営巣が確認された場合には、営巣地周辺の立入りを避け、繁殖活動中の個体へのかく乱を少なくすることが望ましい。繁殖期の生息状況については不明点が多いため、調査が望まれる。

【関連文献】

八王子・日野カワセミ会, 2006; 瑞穂自然科学同好会(編), 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



トビ

*Milvus migrans*タカ目
タカ科

【形態・生態】

体長雄 58.5 cm、雌 68.5 cm。成鳥は全体が茶褐色で、翼下面の外側に白斑がある。尾はたたむと凹形、広げると尾端が直線に揃う。海岸部や平地の河川・池沼に多いが、高山にも生息する。樹林で繁殖し、主に死肉を食べるが、ネズミ類、ヘビ類、カエル類などの小動物を食べることもある。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では留鳥または漂鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

丘陵地から低山地、東京湾の埋立地の一部で周年見られる。冬には、大河川下流域や海岸付近に見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営巣に必要な大径木の減少や、休息地となる樹林への人・車の立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。河岸段丘崖に大径木を有する樹林を育成することや、必要に応じてこうした樹林への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



チュウヒ

*Circus spilonotus*タカ目
タカ科

【形態・生態】

体長雄 48 cm、雌 58 cm。翼と尾が長く見える。羽色に個体差があるが、体上面は茶褐色。平地の草地、干拓地、耕作地、湿地のヨシ原などに生息する。ネズミ類や小鳥、カエル類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州では冬鳥。

【都における生息環境】

以前は海岸の埋立地や河川敷の広大なヨシ原、草地に渡来していたが、現在では稀に見られるのみ。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸の埋立地や河川敷の広大なヨシ原や草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する広大なヨシ原、草地を可能な限り保全することや、こうした草地環境を創出すること、また、現存する草地への人の立入りや車の乗入れについて、必要に応じて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 瑞穂自然科学同好会(編), 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ハイロチュウヒ

*Circus cyaneus*タカ目
タカ科

【形態・生態】

体長雄 43 cm、雌 53 cm。雄成鳥は頭部からの上面と顔から胸までが灰色で、体下面は白い。冬に河口周辺や干拓地などの広大な湿地環境に局地的に渡来し、ネズミ類や小鳥、カエル類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【都における生息環境】

以前は海岸の埋立地や河川敷の広大なヨシ原、草地に渡来していたが、現在では稀に見られるのみ。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸の埋立地や河川敷の広大なヨシ原や草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する広大なヨシ原、草地を可能な限り保全することや、こうした草地環境を創出すること、また、現存する草地への人の立入りや車の乗入れについて、必要に応じて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ツミ

*Accipiter gularis*タカ目
タカ科

【形態・生態】

体長雄 27 cm、雌 30 cm。雄成鳥は頭部からの上面が暗青灰色で体下面は白く、胸から脇は淡橙色。平地から山地の樹林に生息し、繁殖する。主にスズメ、シジュウカラなどの小鳥や昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州（東北）では夏鳥。本州（関東以南）、四国、九州、南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

平地や丘陵地、山地などの樹林や河畔林に生息するが、個体数は少ない。最近は市街地の公園などの樹林でも営巣することがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

ハシブトガラスによる雛の捕食や、写真撮影や観察などの人為的ストレスによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。ごみ処理を適正に行うことで、ハシブトガラスの生息密度を低く抑える必要があるほか、市街地の公園などで営巣している場合、必要に応じて営巣場所に接近する観察者などへの注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

山口貞子, 1989; 植田睦之, 1992; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ハイタカ

*Accipiter nisus*タカ目
タカ科

【形態・生態】

体長雄 31.5 cm、雌 39 cm。体上面は青灰色で、体下面は白く、胸から腹に橙褐色の横斑がある。平地から山地の樹林、耕作地、河川敷に生息し、営巣は普通、樹林内に行く。主にスズメ、シジュウカラなどの小鳥を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国では留鳥または漂鳥。九州では冬鳥。

【都における生息環境】

平地や丘陵地、山地、河川敷などの樹林に生息するが、繁殖期の観察例は少なく、営巣については不明な点が多い。冬は、海岸の緑地など区部でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などによる山地や丘陵地の樹林の減少や、営巣場所や海岸の緑地などでの人・犬の接近によるかく乱などが、本種の生存を脅かす要因である。営巣が確認された場合には、繁殖期間中は営巣場所周辺の立入りを避けることや、冬に、都市部や海岸の緑地で生息が確認された場合には、必要に応じて休息場所や狩り場周辺への人の立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 吉邨隆資, 2011.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オオタカ ※備考 (p.376)

*Accipiter gentilis*タカ目
タカ科

【形態・生態】

体長雄 50 cm、雌 56.5 cm。頭部からの体上面は暗青灰色で、体下面は白く細い暗灰色の横帯がある。平地から山地の樹林に生息し、繁殖する。ハト類やカモ類など主に中型の鳥類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥または漂鳥。

【都における生息環境】

低山地から丘陵地、平地の人があまり立ち入らない樹林で営巣するが、個体数は少ない。冬は、公園など都市緑地の樹林でも見られる。

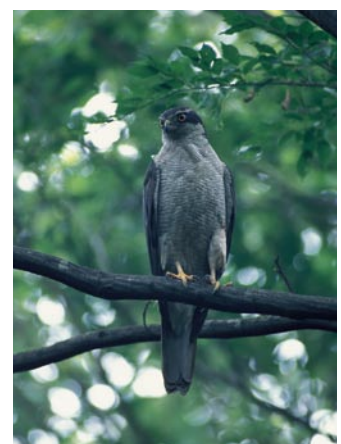
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営巣可能な大径木の減少や写真撮影などの人為的ストレスによる繁殖活動のかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。営巣可能な大径木を有する樹林の育成を図ることや、人が立ち入りやすい場所で営巣が確認された場合には、必要に応じて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京オオタカ連絡会, 1995; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



サシバ

Butastur indicus

タカ目
タカ科



【形態・生態】

体長 49 cm。雄成鳥の頭部は灰褐色で、体上面、胸は茶褐色。喉は白く、中央に1本縦斑がある。体下面は白く、茶褐色の横斑がある。主に低山地の樹林で繁殖し、カエル類やヘビ類、バッタ類などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では冬鳥または旅鳥。

【都における生息環境】

近年は、繁殖期には稀に見られるのみ。以前は南多摩の丘陵地や西多摩の低山地で営巣していたが、最近の営巣については不明である。また、渡りの時期には、通過個体が東京都本土部各地で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

食物となる昆虫類や両生・爬虫類が多い草地・湿地環境と営巣場所となる樹林がセットで存在する谷戸環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。丘陵地や低山地ではこうした谷戸環境を保全することや、営巣が確認された場合には、必要に応じて営巣場所周辺への人の立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 吉邨隆資, 2011.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ノスリ

Buteo buteo

タカ目
タカ科



【形態・生態】

体長 54 cm。体下面は淡いソバ色で翼先、翼角に暗褐色の斑がある。尾は短く円尾で下面に細い横帯がある。山地の樹林で繁殖し、冬は広大な干拓地、河川敷、耕作地などで越冬する。主にネズミ類などの小動物を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国では留鳥または漂鳥。九州では冬鳥。

【都における生息環境】

西多摩の丘陵地、山地などの樹林で営巣する。冬は、河川敷や海岸の緑地など、樹林のある水辺で良く見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

食物となる小動物が多い草地環境や、営巣場所となる大径木のある樹林の減少が、本種の生存を脅かす要因である。山地から丘陵地では大径木を有する樹林と草地や耕作地が混在する環境や、沿岸域では樹林と草地や湿地環境が混在する環境を可能な限り保全することや、営巣や休息場所などが確認された場合には、必要に応じて人の立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

瑞穂町教育委員会, 1994; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



クマタカ

Nisaetus nipalensis

タカ目
タカ科



【形態・生態】

体長雄 72 cm、雌 80 cm。成鳥は額から頭頂、顔が黒褐色で、後頭には冠羽がある。両翼および尾には黒褐色の横帯がある。低山地から亜高山帯の樹林に周年生息し、繁殖する。中型の哺乳類や鳥類、爬虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

主に西多摩の山地の樹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営巣場所となる急傾斜地の大型木を有する樹林の減少と、狩りが可能な林内空間を持つ樹林の減少のほか、営巣地での写真撮影などの人為的ストレスによる繁殖行動のかく乱などが、本種の生存を脅かす要因である。クマタカの営巣が可能な大型木を有する樹林や、狩りが可能な林内空間を有する樹林を保全、育成することや、必要に応じて、営巣地周辺への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

八王子・日野カワセミ会, 2006; 山口孝, 2008; 御手洗望ら, 2011.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オオコノハズク

Otus lempiji

フクロウ目
フクロウ科



【形態・生態】

体長 23.5～26 cm。成鳥は全体に黒褐色で、灰黒色、灰白色、バフ色の複雑な虫食い斑がある。平地から山地の樹林に生息し、昆虫類やネズミ類、小鳥、トカゲ類、カエル類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州では留鳥または漂鳥。四国、九州、南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

奥多摩の樹林で繁殖の可能性があるが記録はない。冬は東京都本土部全域で生息記録があるが少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林性の鳥で、開発などによる伐採や植林による広葉樹主体の樹林の減少、冬のねぐらでの写真撮影など人為的ストレスによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の樹林環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくこと、また、冬にねぐらが特定できた場合には、必要に応じて人の立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

山口正信, 1981; 瑞穂自然科学同好会 (編), 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



鳥
類

コノハズク

Otus sunia

フクロウ目
フクロウ科



【形態・生態】

体長 18.5～21.5 cm。全体が褐色の個体と赤みを帯びた個体がいる。黒褐色、淡橙色、白色などの複雑な模様がある。山地の樹林に生息し、昆虫類やミミズ類、小鳥、トカゲ類、カエル類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

西多摩の樹林でごく少数が見られる。繁殖していると思われるが確証はない。冬は平地の樹林に生息することがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林性の鳥で、開発などによる伐採や植林による広葉樹主体の樹林の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の樹林環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくことが望ましい。また、繁殖や採食など生態や行動に不明な点が多いため、情報の蓄積が望まれる。

【関連文献】

山口孝ら, 2009.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



フクロウ

Strix uralensis

フクロウ目
フクロウ科



【形態・生態】

体長 48～52 cm。成鳥は頭部から背は灰褐色で、褐色縦斑がある。顔にはハート形の縁取りがある。平地から山地の大径木のある樹林に生息し、主に樹洞で営巣する。ネズミ類などの小動物を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

多摩地域の丘陵地や低山地の樹林に生息し、主に樹洞で営巣するが、個体数は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営巣可能な大径木を有する樹林と、採食場となる耕作地や林床植生の薄い樹林がセットで有する環境が、開発などにより減少していることや、営巣地での写真撮影など人為的ストレスによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境を可能な限り保全することや、必要に応じて、営巣地への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

川内博, 1983; 金井郁夫・菱山忠三郎 (編著), 1988; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

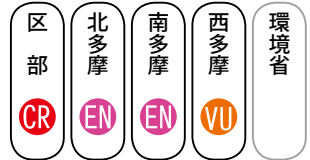
(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



アオバズク

Ninox scutulata

フクロウ目
フクロウ科



【形態・生態】

体長 27 ~ 30.5 cm。成鳥は頭部から尾にかけての上面が黒褐色で、体下面は白地に黒褐色の縦斑がある。平地から山地の樹林、大径木のある社寺林などに生息し、主に昆虫類を食べる。樹洞で営巣する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

丘陵地や低山地の山裾や平地の大径木のある公園、社寺などに生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

枯死、伐採などによる営巣可能な樹洞のある大径木の減少や、公共緑地での殺虫剤の使用などによる昆虫類の減少、営巣地での写真撮影など人為的ストレスによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。営巣木となる大径木を可能な限り保全することや、枯死、倒木などで営巣木が失われた場合には、巣箱をかける配慮が望ましい。また、必要に応じて、営巣地への立入りについて注意喚起を行うことや、営巣地周辺での薬剤散布を控えることが望ましい。

【関連文献】

川内博, 1997; 小金井自然観察会, 2000; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



トラフズク

Asio otus

フクロウ目
フクロウ科



【形態・生態】

体長 35 ~ 40 cm。羽角が長い。翼は長く、飛翔時の翼上面は初列風切基部の淡い橙褐色が目立つ。平地から山地の樹林、河畔林、耕作地、草地などに生息し、ネズミ類や小鳥などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州(中部以北)では留鳥。本州(中部以南)、四国、九州、南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

採食地となる河川敷など低木が混在する草地や、ねぐらとなる大きな公園の樹林や竹林に生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

採食地となる河川敷の草地や河畔林の減少のほか、ねぐらでの写真撮影などの人為的ストレスによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息環境を可能な限り保全することや、河川改修の際には河川敷の草地環境とともに河畔林が維持されるよう配慮すること、また、ねぐらが特定できた場合には、必要に応じて人の立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

府中野鳥クラブ(編), 2003; 清水徹男, 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

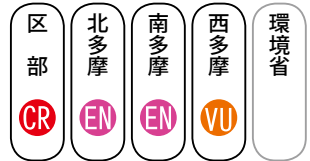
(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



コミミズク

Asio flammeus

フクロウ目
フクロウ科



【形態・生態】

体長 35 ~ 41 cm。羽角が短い中型のフクロウ類。成鳥は翼が長く、静止時は翼先が尾を越える。平地から山地の草地、耕作地、河原、埋立地などに生息し、ネズミ類や小鳥、昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【都における生息環境】

以前は、海岸の埋立地や造成地の広大な草地などでも生息していたが、最近では人の立入りが少ない河川敷の草地で少数が見られるだけである。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息地となる広大な草地の減少と、生息地への人・犬・車などの立入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。東京都本土部で本種が生息可能な草地は、河川敷にほぼ限られることから、現存する生息地を可能な限り保全することや、冬に渡来が確認された場所では、人・車などの立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

川内博, 1981; 御手洗望ら, 2008; 御手洗望ら, 2009.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



アカショウビン

*Halcyon coromanda*ブッポウソウ目
カワセミ科

【形態・生態】

体長 27.5 cm。全身が朱色で、大きな赤い嘴が目立つ。樹林に生息して、朽木やキツツキ類の古巣などに営巣する。魚類やカエル類、サワガニなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で夏鳥。

【都における生息環境】

以前は南多摩にも生息していたが、1980年代以降記録がほとんどない。現在も西多摩で繁殖の可能性があるが、明確な記録はない。渡りの時期には、平地の緑地で見られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

砂防工事などによるサワガニやカエル類などの減少、営巣場所となる朽ちた倒木の減少が、本種の生存を脅かす要因である。沢沿いを中心に人工林から広葉樹林へ転換していくことや、砂防工事の際、土砂や濁水の流出を抑制し、食物となる生物への影響を低減することや、写真撮影の対象にもなるため、必要に応じて生息場所への立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 金井郁夫, 1989; 東京都環境保全局, 1997.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



カワセミ

※備考 (p.376)

*Alcedo atthis*ブッポウソウ目
カワセミ科

【形態・生態】

体長 17 cm。成鳥は背面が光沢のある青色で、頭部、頬、雨覆は黒褐色。胸からの体下面は橙色。平地から低山地の河川、湖沼、都市公園の池などに生息する。小魚やザリガニ、エビ類、カエル類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州、四国、九州、南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

水質汚染が激しかった1960～70年代は多摩地域の西部まで分布が縮小したが、近年は都市部の小河川や公園の池でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修などによる営巣可能な土の崖の減少や、水質の悪化やブラックバスなどの捕食による小魚の減少、観察や写真撮影など人為的ストレスによる営巣活動のかく乱などが、本種の生存を脅かす要因である。河川改修などの工事では、営巣場所となる土の崖を残すなどの配慮や、必要に応じて、営巣地への立入りについて注意喚起を行うことが望まれる。

【関連文献】

川内博, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 清水徹男, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ヤマセミ

*Megaceryle lugubris*ブッポウソウ目
カワセミ科

【形態・生態】

体長 37.5 cm。成鳥は頭部や背から尾、翼上面は白と黒の細かなまだら模様で、頭の羽は冠羽状になっている。山地の渓流や湖沼などに生息し、魚類やカエル類、サワガニなどを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

河川の中流域から上流域に少数生息し、繁殖している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

護岸工事や土砂災害防止工事による営巣可能な崖地の減少や、水質の悪化や河川改修などによる食物となる魚類の減少、写真撮影など人為的ストレスによる繁殖のかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。河川周辺での工事では営巣環境を維持するように配慮することや、営巣が確認された場合には、必要に応じて立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

川内博, 1997; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ブッポウソウ

Eurystomus orientalis

ブッポウソウ目
ブッポウソウ科



【形態・生態】

体長 29.5 cm。成鳥は全体が金属光沢のある青色で、頭部や顔は黒褐色。平地から低山地の樹林、集落や耕作地に隣接する樹林などに生息し、主に飛翔性昆虫類を食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

以前は奥多摩や南多摩の社寺林など、大径木のある樹林で繁殖していたが、現在は渡りの時期に通過する個体が見られる程度である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

林縁や山腹において、営巣木となる周囲の樹木から突出した大径木の減少が、本種の生存を脅かす要因である。橋脚などの人工物での営巣記録があるほか、中国地方では巣箱の設置により個体数の回復に成功していることから、生息が確認された場合には、巣箱を設置して定着を図ることが望ましい。

【関連文献】

東京都環境保全局, 1997.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オオアカゲラ

Dendrocopos leucotos

キツツキ目
キツツキ科



【形態・生態】

体長 28 cm。成鳥は後頸から尾までが黒く、腰は白い。腹から下尾筒までは淡赤色。雄の頭頂は赤い。平地から山地の高木の多い樹林に生息し、昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥または漂鳥。

【都における生息環境】

山地の高木の多い広葉樹主体の自然林に生息し、繁殖している。冬は低山地まで漂行する。

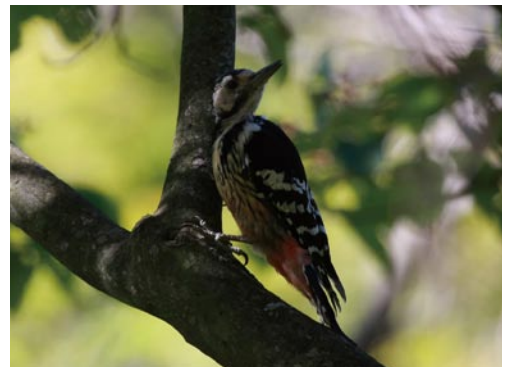
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

植林に伴う山地の広葉樹林の伐採が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息環境を可能な限り保全することや、人工林から広葉樹林へ転換していくことが望ましい。生息分布情報が少ないので、情報の蓄積が望まれる。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

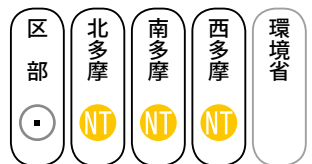
(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



アカゲラ

Dendrocopos major

キツツキ目
キツツキ科



【形態・生態】

体長 23.5 cm。雄成鳥は頭頂と後頸から尾にかけての背面や顎線、耳羽から側胸にかけてが黒色で、後頭が赤い。平地から山地の樹林に生息し、昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州で留鳥または漂鳥。

【都における生息環境】

多摩地域の丘陵地や山地の樹林に生息し、繁殖している。渡りの時期や冬は、都市部の公園緑地の樹林でも見られることがある。

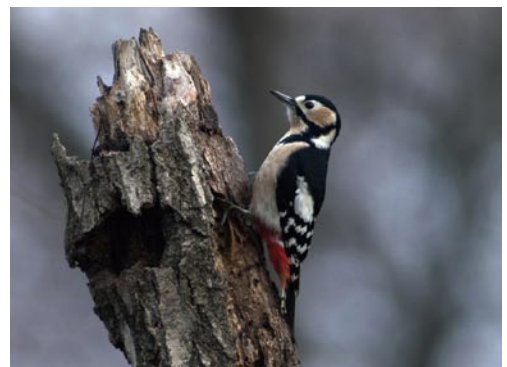
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発や植林による営巣可能な枯れた大径木の減少や、営巣場所周辺での写真撮影など人為的ストレスによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。大径木の保全を図り枯死木を残すことや、営巣が確認された場合には、必要に応じて立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



アオゲラ

*Picus awokera*キツツキ目
キツツキ科

【形態・生態】

体長 29 cm。成鳥は顔から頸が灰色、背面は黄緑色。額と眼先は黒く後頭は赤い。平地から山地の樹林に生息し、昆虫類やクモ類、ムカデ類などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

多摩地域の丘陵地から山地の樹林に生息し、繁殖している。近年は都市部の公園緑地の樹林でも局地的に営巣が確認されている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発や植林による営巣可能な枯れた大径木の減少や、営巣場所周辺での写真撮影など人為的ストレスによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。大径木の保全を図り、枯死木を残すことや、営巣が確認された場合には、必要に応じて立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

瑞穂町教育委員会, 1994; 川内博, 2000; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



チョウゲンボウ

*Falco tinnunculus*ハヤブサ目
ハヤブサ科

【形態・生態】

体長雄 30 cm、雌 33 cm。雄成鳥は頭頸部、顔、腰から尾にかけてが青灰色。背、翼上面は茶褐色。平地から山地の崖のほか、橋脚や煙突などの人工建造物で繁殖する。ネズミ類や小鳥、昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州(中部以東)では留鳥または漂鳥。本州(中部以西)、四国、九州、南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

海岸の埋立地や河川敷の草地、丘陵地や低山地の耕作地や造成地、住宅地などで見られ、営巣もしている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

食物となるネズミ類や小鳥、昆虫類の豊富な広大な草地環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する広大なヨシ原、草地を可能な限り保全することや、こうした草地環境を創出すること、また、現存する草地への人の立入りや車の乗入れについて、必要に応じて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

川内博, 1997; 瑞穂自然科学同好会(編), 2006; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



コチョウゲンボウ

*Falco columbarius*ハヤブサ目
ハヤブサ科

【形態・生態】

体長雄 28 cm、雌 31 cm。雄成鳥は頭頂、背の上面が鮮やかな青灰色。喉は白く、胸からの体下面は橙褐色で、黒褐色の縦斑がある。耕作地、干拓地、草地など開けた場所に生息し、主に小鳥を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【都における生息環境】

海岸の埋立地、河川敷の広大な草地や低木林などで少数見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

埋立地や河川敷に見られる広大な草地、低木林の減少が、本種の生存を脅かす要因である。こうした草地や樹林が混在する環境を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

世田谷の鳥編集委員会(編), 2009.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

チゴハヤブサ

*Falco subbuteo*ハヤブサ目
ハヤブサ科

【形態・生態】

体長 28～31 cm。成鳥は頭頂からの上面が青灰黒色。喉からの体下面は白く、黒色縦斑がある。下腹、下尾筒、脛毛は赤褐色。一般に平地から低山地の樹林で繁殖する。軽快に飛びながら小鳥や昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州（北部）では夏鳥。本州、四国、九州、南西諸島では旅鳥。

【都における生息環境】

秋に海岸の埋立地や河川敷の広大な草地において、渡りの途中と思われる個体が見られる。西多摩で見られることもあるが、繁殖については不明。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

渡りの途中に利用する埋立地や河川敷の低木が混在する広大な草地を、可能な限り保全することが望ましい。渡り時期も含め、調査がほとんど行われていないため生息状況は不明である。詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 府中野鳥クラブ(編), 2003.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ハヤブサ

*Falco peregrinus*ハヤブサ目
ハヤブサ科

【形態・生態】

成鳥は上面が青黒色で、眼から頬にはひげ状の黒斑がある。平地から山地の海岸、河口、河川、湖沼、耕作地などに生息し、一般に崖地の岩棚や横穴で繁殖する。主に飛んでいる鳥類を捕まえて食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では留鳥または漂鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

主に非繁殖期の8月から2月にかけて、海岸や河川敷を中心に見られる。都市部のビル街に現れることもある。繁殖期に観察されることもあるが、営巣については不明である。また、秋には渡りの個体が見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

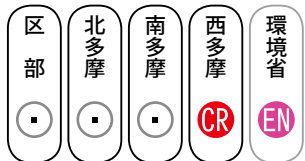
食物となる小鳥やシギ・チドリ類の集まる干潟や河川敷の広大な草地、水田などの減少が、本種の生存を脅かす要因である。営巣については不明であるが、大阪などの都市部ではビルや橋脚などコンクリート建造物への営巣事例があるので、繁殖期に生息が確認された場合には、営巣確認の調査実施が望まれる。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 瑞穂自然科学同好会(編), 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ヤイロチョウ

*Pitta nympha*スズメ目
ヤイロチョウ科

【形態・生態】

体長 18 cm。羽色は非常に美しく、成鳥は眉斑は淡黄色で長く、背や肩羽、中・大雨覆、次列・三列風切は光沢のある緑色。小雨覆と腰、上尾筒は光沢のある青色。主に低山地の常緑広葉樹林やマツ林、人工林に生息し、昆虫類やミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

本州（東北以南）、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

東京都本土部での記録は、南多摩での渡りの時期の記録だけであったが、最近、奥多摩の山中で繁殖期に生息が確認された。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

林内に飛行できる空間があり、ミミズ類などの土壌生物の多い樹林が生息環境であるため、こうした環境を保全することや人工林から広葉樹林への転換を進めることが望ましい。記録が少なく生息状況に不明な点が多いことや、最近になり繁殖期に長期間生息が確認されていることから、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

神田忠良, 2010

(執筆: 金井裕・川内博)



サンショウクイ

*Pericrocotus divaricatus*スズメ目
サンショウクイ科

【形態・生態】

体長 20 cm。雄成鳥は額、喉から側頸と体下面は白く、背面は灰色。翼と尾は黒褐色。頭頂から後頸、過眼線は黒くつながっており、嘴と足は黒色。平地から山地の広葉樹林に生息し、昆虫類やクモ類を食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

以前は都心部の樹林で繁殖期の記録があり、南多摩や西多摩の樹林に生息していたが、近年は渡りの時期に通過個体が見られるのみである。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

南方系の樹林性鳥類であるので、平地から低山地の広葉樹の高木を有する樹林の減少が、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。現存する広葉樹の高木の保全と合わせ、平地から低山地までの人工林を広葉樹林へ転換していくことが望ましい。

【関連文献】

山口正信, 1981; 東京都環境保全局, 1997.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

サンコウチョウ

*Terpsiphone atrocaudata*スズメ目
カササギヒタキ科

【形態・生態】

体長雄 44.5 cm、雌 17.5 cm。雄成鳥は頭から胸にかけて黒紫色で、後頭に短い冠羽がある。体下面は白く、尾は黒色で中央の2枚が非常に長い。平地から低山地の薄暗い樹林に生息し、飛翔性昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

本州、四国、九州、南西諸島で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩や南多摩の丘陵地や山地の樹林に渡来し繁殖しているが、個体数は著しく減少している。渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

広葉樹林の伐採による飛翔性昆虫類の減少や、営巣地周辺での写真撮影など人為的ストレスによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の環境は可能な限り保全することや、人工林へ広葉樹の移植を行い食物資源の回復を図るとともに、枝打ちを行って採食のための林内空間を確保すること、また、営巣が確認された場合には、必要に応じて立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

瑞穂町教育委員会, 1994; 清水徹男, 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



チゴモズ

*Lanius tigrinus*スズメ目
モズ科

【形態・生態】

体長 18.5 cm。雄成鳥は額から後頸にかけて青灰色で、過眼線は太く黒い。背面や翼は茶褐色で体下面は白い。平地から山地のアカマツ林や雑木林の林縁や開けた林内などに生息し、昆虫類やミミズ類、両生・爬虫類などを食べる。

【分布の概要】

本州(中部以北)で夏鳥。

【都における生息環境】

以前は北多摩の丘陵地から平地の雑木林や公園・墓地、耕作地などで繁殖していたが、近年は河畔林や耕作地で稀に見られる程度である。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

疎林に生息するため、耕作地、特に植木畑の減少が、本種の生存を脅かす要因であると考えられる。大河川の河川敷や大規模な公園の緑地において、可能な限り疎林が成立するような管理を行うことが望ましい。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 清水徹男, 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



モズ

Lanius bucephalus

スズメ目
モズ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
VU	VU	NT	NT	

【形態・生態】

体長 20 cm。雄成鳥は頭部から後頭が茶褐色で、過眼線は黒い。背面は灰色、翼と尾は黒褐色。平地から山地の疎林、耕作地、河畔林、公園などに生息し、昆虫類やミミズ類、両生・爬虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では留鳥または漂鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

河川敷、丘陵地の低木林や草地、雑木林、耕作地、公園、住宅地などに広く生息し、繁殖をしている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などにより、丘陵地の低木林や草地、耕作地といった本種の繁殖できる環境が減少している。現存する繁殖環境は可能な限り保全することや、公園内や耕作地の周囲に草本類が繁茂する場所が残るように、可能な範囲で草刈り頻度の調節を行うなど配慮することが望ましい。

【関連文献】

川内博, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

アカモズ

Lanius cristatus

スズメ目
モズ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
CR	CR	CR	CR	EN

【形態・生態】

体長 20 cm。雄成鳥は頭頂から背、肩羽、腰、尾までが赤茶色で翼は黒褐色。体下面は白く、嘴と足は黒い。平地から山地の明るい樹林や低木のある草地、林縁、耕作地などに生息し、昆虫類やミミズ類、両生・爬虫類、鳥類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では旅鳥または冬鳥。

【都における生息環境】

以前は丘陵地から平地の明るい雑木林や、大河川中流域の低木が混じる河川敷の草地で繁殖していたが、近年は記録がない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

疎林や草地環境、耕作地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。大河川の河川敷や大規模な公園の緑地において、可能な限り疎林や草地が成立するような管理を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都環境保全局, 1997; 清水徹男, 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

ホシガラス

Nucifraga caryocatactes

スズメ目
カラス科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
○	○	○	VU	

【形態・生態】

体長 34.5 cm。成鳥は頭頂、翼、尾を除いて黒褐色地に細かな白斑が密にある。亜高山帯から高山帯の針葉樹林に生息し、ハイマツやシラビソ、ブナなどの種子や昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥または漂鳥。

【都における生息環境】

亜高山帯の樹木が少ない場所に少数生息し、繁殖していると思われる。冬は、山地の樹林まで移動してくることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすい。都には少ない亜高山帯の鳥であり、生息状況に不明な点が多いので、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

東京都公書局, 1980; 東京都環境保全局, 1997.



(執筆: 金井裕・川内博)

キクイタダキ

Regulus regulus

スズメ目
キクイタダキ科



【形態・生態】

体長 10 cm。成鳥は頭頂に 2 本の黒線に挟まれた黄色部がある。眼のまわりに白い輪がある。亜高山帯の針葉樹林に生息し、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国では留鳥または漂鳥。九州、南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

南多摩と西多摩の山地の針葉樹林で周年生息し、繁殖している。スギ・ヒノキ植林にも生息するが、モミ・ツガ類のある樹林を好む。秋・冬には、丘陵地や平地の針葉樹の多い樹林にも移動してくる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

山地の樹林内のモミ・ツガ類を保全、育成することが望ましい。繁殖に関しては不明な点が多いため、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

東京都環境保全局, 1997; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



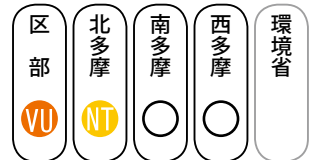
(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

鳥
類

ヤマガラ

Poecile varius

スズメ目
シジュウカラ科



【形態・生態】

体長 14 cm。成鳥は頭部から後頭までが黒く、額から頬は黄褐色。脇から胸にかけては黒く、胸上部で横帯となる。平地から山地の樹林に生息し、植物の種子や昆虫類、クモ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島で留鳥。

【都における生息環境】

南多摩や西多摩の樹林に広く生息し、繁殖する。区部や北多摩では生息地が限定される。近年、平地では生息地が拡大している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発による樹林の伐採が、本種の生存を脅かす要因である。現存する樹林を可能な限り保全すること、公園緑地の樹林では、枝打ちなどは控えることが望ましい。また、近年、平地での分布が拡大しているため、調査を実施して変化傾向やその要因について、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997.



(執筆: 金井裕・川内博)

ヒバリ ※備考 (p.376)

Alauda arvensis

スズメ目
ヒバリ科



【形態・生態】

体長 17 cm。全体に褐色で、後頭に冠羽がある。翼は黒褐色で、濃いバフ色の羽縁がある。眼の後方から耳羽を囲むように細い黒線がある。草地、耕作地などに生息し、植物の種子や昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州では留鳥。

【都における生息環境】

以前は山地を除く全域で見られ繁殖していたが、現在は広い草地が存在する河川敷や造成地などに限られる。冬は河川敷や耕作地のほか、公園のグラウンドでも少数見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

草丈が 30 cm 程度までの広い草地の減少や、生息地への人や犬の立ち入りによるかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地では、草地環境を可能な限り保全することや、必要に応じて人の立ち入りについて注意喚起を行うことが望ましい。また、耕作地周辺や河川の堤防では、草地を残すため草刈り頻度の調節を行うなどの配慮が望まれる。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

コシアカツバメ

Hirundo daurica

スズメ目
ツバメ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
VU	VU	NT	NT	

【形態・生態】

体長 18.5 cm。成鳥の背面は藍色光沢のある黒色。腰は橙色で、飛翔時によく目立つ。体下面はくすんだ白色で、黒褐色の細い縦斑が密にある。市街地や耕作地に生息し、飛翔性昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

南多摩や北多摩、奥多摩の住宅団地などに局所的に生息する。秋の渡りの時期には、多数の通過個体が見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

住宅団地などコンクリートの構造物に営巣することが多いが、糞が嫌われ、住民により巣が撤去されることがある。営巣場所周辺で、住民の理解と協力を得ることが望まれる。

【関連文献】

長野まゆみ, 1987; 清水徹男, 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

ウグイス

Cettia diphone

スズメ目
ウグイス科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
○	NT	NT	○	

【形態・生態】

体長 14 ~ 15.5 cm。成鳥は頭部から尾までの背面と翼が暗い黄緑色。白色の眉斑と淡黒褐色の過眼線がある。平地から山地のササが茂る樹林に生息し、昆虫類や植物の種子、果実などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州、四国、九州、南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

丘陵地や山地の林床にササなどが繁茂した樹林で繁殖している。冬は平地の樹林でも見られる。区部でも繁殖期に見られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などによる樹林の減少、林床植生の刈払い、シカの増加による林床植生への食害などが、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息環境を可能な限り保全することや、シカによる植生変化を防止すること、樹林管理を行っている林分では林床植生が繁茂する区画を設けるなど配慮することが望ましい。このほか、ソウシチョウなどが競合している可能性もあるため、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

川内博, 1982; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ヤブサメ

Urosphena squameiceps

スズメ目
ウグイス科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
●	VU	VU	NT	

【形態・生態】

体長 10.5 cm。成鳥は頭部から尾までの背面と翼が茶褐色で、眉斑は淡色で明瞭。平地から山地の林床植生が繁茂した樹林に生息し、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州では夏鳥。南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

丘陵地や山地の林床植生が繁茂した樹林で繁殖している。渡りの時期には、通過個体が平地の樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などによる樹林の減少のほか、林床植生の管理が行われている林分での林床の刈払い、シカの増加による林床植生への食害などが、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息環境を可能な限り保全することや、シカによる植生変化を防止すること、また、樹林管理を行っている林分では、林床植生が繁茂する区画を設けるなど配慮することが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



エナガ

*Aegithalos caudatus*スズメ目
エナガ科

【形態・生態】

体長 13.5 cm。成鳥は額から後頸が白く、黒い眉斑は、頸、背の黒色部につながる。体下面は白く、下尾筒にかけては薄紫色。平地から山地の樹林などに生息し、昆虫類やクモ類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

多摩地域の丘陵地から山地の樹林に生息し、繁殖する。近年、平地でも繁殖が確認されるようになった。渡りの時期には、海岸の緑地でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発による樹林の伐採が、本種の生存を脅かす要因である。現存する樹林を可能な限り保全することが望ましい。また、近年生息分布に大きな変化が見られているため、調査を実施して変化傾向やその要因について、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

東京都公書局, 1980; 川内博, 2009.

(執筆: 金井裕・川内博)



メボソムシクイ

*Phylloscopus xanthodryas*スズメ目
ムシクイ科

【形態・生態】

体長 13 cm。成鳥は頭部から腰までの背面が暗緑色で、過眼線は暗色。体下面は淡黄色。主に亜高山帯の針葉樹林に生息し、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩の亜高山帯に渡来し、繁殖している。春・秋の渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすいが、生息状況については不明な点が多いので、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

東京都環境保全局, 1997; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001.

(執筆: 金井裕・川内博)



エゾムシクイ

*Phylloscopus borealoides*スズメ目
ムシクイ科

【形態・生態】

体長 11.5 cm。成鳥は頭頂から後頸が暗灰褐色で、翼や尾は黒褐色。眉斑は白く明瞭で過眼線は暗褐色。亜高山帯の針葉樹林に生息し、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州(中部以北)、四国で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩の標高 1,500m 以上の樹林に渡来し、繁殖している。春・秋の渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすいが、生息状況については不明な点が多いので、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

東京都公書局, 1980; 東京都環境保全局, 1997.

(執筆: 金井裕・川内博)



センダイムシクイ

*Phylloscopus coronatus*スズメ目
ムシクイ科

【形態・生態】

体長 12.5 cm。成鳥は頭部から背にかけてオリーブ色。頭中央線は淡色だが個体によっては不明瞭。平地から山地の落葉広葉樹林に生息し、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩や南多摩の丘陵地や山地の広葉樹林に渡来し、繁殖している。春・秋の渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発や植林などによる広葉樹林の減少や、管理が行われている樹林での林床植生の刈払いなどが、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくこと、また、樹林管理を行っている林分では、林床植生が繁茂する区画を設けるなど配慮することが望ましい。

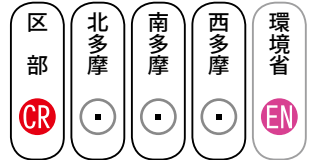
【関連文献】

東京都環境保全局, 1997; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オオセツカ

*Locustella pryeri*スズメ目
センニュウ科

【形態・生態】

体長 13 cm。成鳥は頭部から尾までの背面と翼が濃茶色で、黒褐色の縦斑がある。眉斑と眼先は淡色。海岸や河口、河川、湖沼などのヨシ原やそれに続く草原に生息し、昆虫類やクモ類などを食べる。

【分布の概要】

本州で留鳥(青森、茨城、千葉で局地的に繁殖。東北以南で越冬)。

【都における生息環境】

海岸の埋立地や河川敷のヨシ原で記録があり、越冬している可能性がある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

埋立て、浚渫、河川改修、アレチウリの繁茂などによるヨシやスゲ類が混生する広大な湿性草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。ヨシ原とその他の草地が混在する場所を可能な限り広域に保全することや、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1975.

(執筆: 金井裕)



オオヨシキリ

*Acrocephalus orientalis*スズメ目
ヨシキリ科

【形態・生態】

体長 18.5 cm。成鳥は頭部から尾にかけての背面が灰褐色で、体下面は淡色。河口、河川、湖沼のヨシ原などに生息し、昆虫類やクモ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

河川敷や海岸の埋立地などのヨシ原で繁殖している。渡りの時期には、平地の池のある公園などで見られることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

埋立て、浚渫、河川改修、アレチウリの繁茂などによる広大なヨシ原の減少が、本種の生存を脅かす要因である。広大なヨシ原が現存する場所を可能な限り保全することや、必要に応じてヨシ刈りや火入れなどにより、生育を補助すること、また、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



コヨシキリ

*Acrocephalus bistrigiceps*スズメ目
ヨシキリ科

【形態・生態】

体長 13.5 cm。成鳥は頭部から腰にかけての背面が灰褐色で、翼はやや暗色。頭側線と過眼線は黒褐色。平地から山地の草原、湿地、河原などに生息し、昆虫類やクモ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州（中部以北）で夏鳥。

【都における生息環境】

河川敷や海岸の埋立地のヨシ原で観察されることがあり、埋立地で繁殖していた可能性が高い。近年は、春・秋に通過個体が記録される。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

埋立て、浚渫、河川改修、アレチウリの繁茂などによるヨシやその他の草本が混生する広大な草地環境の減少が、本種の生存を脅かす要因である。こうした草地環境が現存する場所を可能な限り広域に保全することや、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。利根川流域では繁殖しているの、生息条件が整えば東京都本土部でも繁殖する可能性はある。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ゴジュウカラ

*Sitta europaea*スズメ目
ゴジュウカラ科

【形態・生態】

体長 13.5 cm。成鳥は頭部から肩にかけての背面が青灰色で、黒い過眼線がある。体下面は白く、脇は淡橙色。低山地から亜高山帯の落葉広葉樹林に生息し、昆虫類やクモ類、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

南多摩や西多摩の高木の多い自然林に生息する。冬は平地や丘陵地の樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発や植林などによる、大径木が多い自然林の伐採が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の樹林環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくことが望ましい。

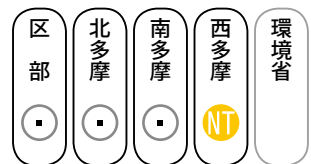
【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



キバシリ

*Certhia familiaris*スズメ目
キバシリ科

【形態・生態】

体長 13.5 cm。成鳥は頭部から背、肩羽が褐色で、翼は黒褐色。眉斑は白く、過眼線は褐色。亜高山帯の針葉樹林に生息し、昆虫類やクモ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

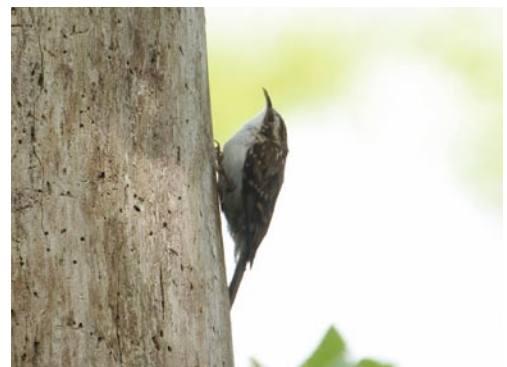
西多摩の高標高地の自然林に生息し、繁殖をしているが、実態はつかめていない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすいが、生息状況については不明な点が多いので、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997.



(執筆: 金井裕・川内博)

ミソサザイ

Troglodytes troglodytes

スズメ目
ミソサザイ科



【形態・生態】

体長 10.5 cm。成鳥は全体に茶褐色で、眉斑と頬はやや淡色。背面と翼には黒褐色の横縞があり、体下面には黒と白の波状横斑がある。渓谷や沢沿いの樹林に生息し、昆虫類やクモ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥または漂鳥。

【都における生息環境】

西多摩や南多摩の渓谷から沢沿いの樹林に周年生息する。冬は低山地や丘陵地の沢に下りてきて越冬するものもいる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

繁殖環境である渓谷や沢沿いの樹林が伐採されること、沢沿いの植生が欠落することが、本種の生存を脅かす要因である。伐採時に沢沿いの樹林を一定範囲残すなどの配慮や、沢沿いの人工林を広葉樹林へ転換していくことが望ましい。

【関連文献】

山口正信, 1981; 瑞穂町教育委員会, 1994; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

カワガラス

Cinclus pallasii

スズメ目
カワガラス科



【形態・生態】

体長 22 cm。成鳥は全体がこげ茶色。嘴は黒くて、足は濃い灰色。水中に潜り、カワゲラやカゲロウなどの水生昆虫や魚類を捕食する。山地の溪流や沢、河川の上流域から中流域など石や岩の多い環境に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

西多摩と南多摩の河川上流域から溪流沿いに少数が生息する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

砂防工事に伴う土砂や濁水の流入による水生昆虫の減少や、釣り人による営巣環境のかく乱が、本種の生存を脅かす要因である。生息地で工事を行う際は、河川の水質が悪化しないように排水管理を徹底することや、落差工の穴を営巣場所として利用することもあるので、砂防ダムの改修を行う際には、営巣環境を維持するよう配慮すること、また、営巣が確認された場合には、必要に応じて立入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

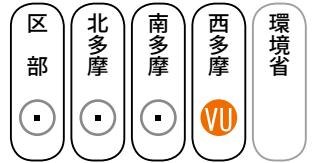


(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

マミジロ

Zoothera sibirica

スズメ目
ヒタキ科



【形態・生態】

体長 23.5 cm。雄成鳥はほぼ全体が黒色で、白色で太く目立つ眉斑がある。嘴は黒く、足は黄橙色。低山地から亜高山帯までの樹林に生息する。昆虫類やミミズ類、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州(中部以北)で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩の自然林に渡来し、繁殖している。近年、個体数が減少していると思われる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

植林のための自然林の伐採などが、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくことが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001.



(執筆: 金井裕・川内博)

トラツグミ

*Zoothera dauma*スズメ目
ヒタキ科

【形態・生態】

体長 29.5 cm。頭部から腰までの背面と翼は黄褐色で黒い小斑が密にある。低山地から亜高山帯までの樹林に生息し、冬は山麓地域に下る。昆虫類やミミズ類、植物の果実などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州、南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

南多摩や西多摩の山地で繁殖し、冬は丘陵地や平地の樹林で越冬する。渡りの時期には、都市部の公園でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

山地では植林のための自然林の伐採、丘陵地から平地の樹林では伐採や低木の刈払いが、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息環境を可能な限り保全することが望ましい。また、繁殖期のさえずりが夜間であり生息情報が十分に得られていないため、詳細な状況の把握が望まれる。

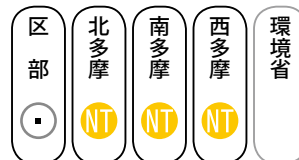
【関連文献】

新井二郎, 1996; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



クロツグミ

*Turdus cardis*スズメ目
ヒタキ科

【形態・生態】

体長 21.5 cm。雄成鳥は頭部から尾までの背面や翼、喉から胸までが暗灰色。体下面は白く、胸から脇にかけて黒斑がある。平地から山地までの樹林に生息し、昆虫類やミミズ類、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

多摩地域の丘陵地や山地の自然林で、少数が繁殖している。渡りの時期には、通過個体が平地の樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

植林による自然林の伐採などが、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくことが望ましい。また、外来種のガビチョウと競合している可能性があるため、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

東京都環境保全局, 1997; 清水徹男, 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



コマドリ

*Luscinia akahige*スズメ目
ヒタキ科

【形態・生態】

体長 14 cm。雄成鳥は額から後頸と背面は茶褐色で、顔から頸、上胸までは赤橙色。体下面は白く、胸には黒帯がある。ササなどが茂る針葉樹林や混交林に生息し、昆虫類やクモ類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩の標高 1,000 m以上の渓谷や山地斜面に渡来し、繁殖している。渡りの時期には、平地の公園の樹林などでも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

植林のための自然林の伐採や、シカの採食による林床植生の衰退が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の樹林環境の保全や、シカによる植生変化を防止することが望ましい。また、鳴き声が美しいため、飼い鳥として密猟されることが多く、より厳しい取締りが望まれる。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997.

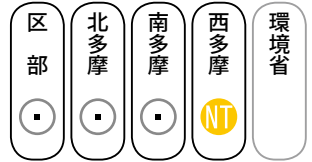
(執筆: 金井裕・川内博)



コルリ

Luscinia cyane

スズメ目
ヒタキ科



【形態・生態】

体長 14 cm。雄成鳥は頭部から尾までの背面や翼の一部が青色で、体下面は白色。嘴は黒い。低山地から亜高山帯のササが茂る落葉広葉樹林や混交林に生息し、昆虫類やクモ類、ミミズ類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州（中部以北）で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩の標高 500 m 以上の林床植生が繁茂した落葉広葉樹林に渡来し、繁殖している。渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

植林のための自然林の伐採や、シカの採食による林床植生の衰退が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の樹林環境の保全や、シカによる植生変化を防止することが望ましい。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997。



(執筆: 金井裕・川内博)

イソヒヨドリ

Monticola solitarius

スズメ目
ヒタキ科



【形態・生態】

体長 25.5 cm。雄成鳥は頭部から尾までの背面と顔、喉から胸までが青色で、腹から下尾筒までは赤褐色。海岸の岩場や崖、河川などに生息するが、市街地でも見られる。岩場があれば内陸でも生息する。昆虫類や甲殻類、両生・爬虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州、四国、九州、南西諸島では留鳥。

【都における生息環境】

海岸や河川敷、平地の鉄道駅の周辺、住宅地などで観察されることがあり、多摩地域では建造物などに営巣し、繁殖している。内陸部では 1990 年代になって観察されるようになった鳥であり、個体数は少ない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息状況が徐々に明らかになっているが、分布や営巣場所についてさらに詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

川内博, 1997; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006。

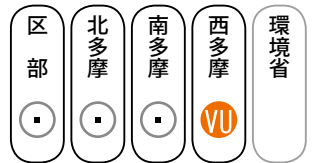


(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

サメビタキ

Muscicapa sibirica

スズメ目
ヒタキ科



【形態・生態】

体長 13.5 cm。成鳥は顔、頭部から尾までの背面が暗灰褐色で、尾や翼は黒褐色。白色のアイリングがある。針葉樹林に生息し、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州（中部以北）で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩の標高 1,500m 以上の樹林に渡来し、繁殖している。春・秋の渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので環境変化の影響を受けやすいが、生息状況については不明な点が多いので、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

東京都環境保全局, 1997; 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001。



(執筆: 金井裕・川内博)

コサメビタキ

*Muscicapa dauurica*スズメ目
ヒタキ科

【形態・生態】

体長 13 cm。成鳥は頭部から尾までの背面が灰褐色で翼は黒褐色。アイリングと眼先が白い。体下面は白色。平地から山地の落葉広葉樹林に生息し、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩や南多摩の丘陵地や山地の広葉樹林で繁殖しているが、個体数は著しく減少している。渡りの時期には平地の樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発や植林などによる広葉樹林の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の樹林環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくこと、また、林内を飛びながら昆虫類を捕食するため、必要に応じて、枝打ちや下草刈りを行い、林内空間の確保をすることが望ましい。

【関連文献】

東京都公書局, 1980; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オオルリ

*Cyanoptila cyanomelana*スズメ目
ヒタキ科

【形態・生態】

体長 16.5 cm。雄成鳥は頭部から尾までの背面が青色で、顔から喉、胸、脇にかけては黒い。体下面は白色。低山地から山地にかけての樹林に生息し、渓谷に沿った樹林を好む。昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で夏鳥。

【都における生息環境】

南多摩や西多摩の山地の渓谷沿いの自然林に渡来し、繁殖している。春・秋の渡りの時期には、平地の樹林でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

植林などによる谷沿いの広葉樹林の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の樹林環境を可能な限り保全すること、人工林を広葉樹林に転換していくことが望ましい。また、姿や鳴き声が美しいため、飼い鳥として密猟されることが多く、より厳しい取締りが望まれる。

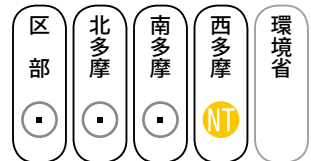
【関連文献】

池谷文夫, 1990; 東京都環境保全局, 1997; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



イワヒバリ

*Prunella collaris*スズメ目
イワヒバリ科

【形態・生態】

体長 18 cm。成鳥は頭部から後頸、胸にかけて暗灰色。体下面は赤茶色で、白い縦斑がある。主に高山帯の森林限界より上の岩場や草原に生息し、昆虫類や植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

本州で留鳥または漂鳥。

【都における生息環境】

亜高山帯の樹木が少ない場所に少数生息し、繁殖していると思われる。冬は、奥多摩の溪流沿いまで移動してくることがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすい。都には少ない高山帯の鳥であり、生息状況に不明な点が多いため、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001.



(執筆: 金井裕・川内博)

カヤクグリ

Prunella rubida

スズメ目
イワヒバリ科



【形態・生態】

体長 14 cm。成鳥は頭部が暗褐色、背面は茶色で、黒褐色の縦斑がある。翼は黒褐色で、体下面は灰黒色。嘴は細く黒い。ハイマツ帯などに生息し、昆虫類や植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州、四国では留鳥または漂鳥。九州では冬鳥。

【都における生息環境】

亜高山帯の高木が少ない場所に少数生息し、繁殖していると思われる。冬は山地から丘陵地の林床植生が繁茂した樹林に移動し、平地の公園の樹林などでも稀に見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすい。都には少ない亜高山帯の鳥であり、生息状況に不明な点が多いため、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

セグロセキレイ

Motacilla grandis

スズメ目
セキレイ科



【形態・生態】

体長 21 cm。成鳥は背面や頸、胸などが黒く、眉斑と喉、体下面は白い。平地から山地の河川、湖沼、耕作地などに生息し、昆虫類を食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で留鳥。

【都における生息環境】

平地から丘陵地の河川沿いに生息し、繁殖している。都市部の小河川沿いでも見られることがある。毎年秋には、南多摩の低木林で 100 ~ 200 羽規模の集団ねぐらを形成する所がある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修による石積みなどの営巣可能な空洞の減少や、コンクリート化などによる川底の単純化で食物となる水生昆虫の減少が、本種の生存を脅かす要因である。河川改修時には、石積護岸の採用などによる営巣可能な空洞の確保に留意することや、河床全面をコンクリートで固める工法は避けるなど配慮することが望ましい。

【関連文献】

府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006; 清水徹男, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ハギマシコ

Leucosticte arctoa

スズメ目
アトリ科



【形態・生態】

体長 16 cm。雄成鳥冬羽は前頭と顔から喉までが黒く、翼は黒褐色。腰は黒褐色で、赤紫色の斑がある。海岸から山地の岩場、草地、耕作地、砂浜などに生息し、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【都における生息環境】

南多摩や西多摩の岩場や崩落地に渡来し、越冬する。採石場跡地や造成地にも飛来する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

越冬地に関する情報が少ないため、越冬期の詳細な状況の把握が望まれる。少なくとも、現存する越冬地の環境については、可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.



(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)

ベニマシコ

*Uragus sibiricus*スズメ目
アトリ科

【形態・生態】

体長 15 cm。雄成鳥夏羽は全体が紅色で、頭は灰白色で黒褐色の縦斑がある。背面と尾は黒い。平地から低山の林縁、草原、湿原、ヨシ原に生息し、昆虫類や植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州(下北半島)では夏鳥。本州(下北より南)、四国、九州では冬鳥。

【都における生息環境】

大河川の河川敷や、海岸の埋立地のヨシ、ススキ、オギの草地や疎林で越冬している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

埋立て、浚渫、河川改修などによる、ヨシやススキなどが生育する草地の減少や、火入れや刈払いによる越冬期の食物資源の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の草地を可能な限り保全することや、越冬期の食物を確保するため、刈払いや火入れを行わないなどの配慮が望ましい。なお、越冬地に関する情報が少ないため、越冬期の詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

川内博, 1984; 新井二郎, 1996; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オオマシコ

*Carpodacus roseus*スズメ目
アトリ科

【形態・生態】

体長 17.5 cm。雄成鳥は頭部から背、腹にかけてが紅色で、背と肩羽には黒褐色の縦斑がある。平地から山地の樹林、林縁の草地、耕作地などに生息し、植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州(中部以北)で冬鳥。

【都における生息環境】

南多摩や西多摩の丘陵地や山地の落葉広葉樹林に少数が渡来し、越冬する。年による個体数の変動が大きい。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発や植林などによる、越冬場所となる落葉広葉樹林の伐採が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地域の樹林を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくことが望ましい。なお、越冬地に関する情報が少ないため、越冬期の詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



イスカ

*Loxia curvirostra*スズメ目
アトリ科

【形態・生態】

体長 16.5 cm。雄成鳥はほぼ全体が暗朱赤色で翼と尾は黒褐色。体下面は白く、下尾筒には黒褐色の斑がある。平地から山地のマツやモミの針葉樹林に生息し、針葉樹の種子などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州で冬鳥。

【都における生息環境】

年により、平地や丘陵地、山地に少数渡来することがある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発や植林、マツ枯れなどによる、越冬場所となるアカマツ林やアカマツ混交林の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息地の樹林環境を可能な限り保全すること、マツ類やモミ類の育成を図ることが望ましい。なお、渡来数は年により増減の幅が大きいため、越冬期の詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ウソ

Pyrrhula pyrrhula

スズメ目
アトリ科



【形態・生態】

体長 15.5 cm。雄成鳥は額から後頭、眼のまわり、腮が黒色で、喉から頬、耳羽までが紅色。繁殖期は亜高山帯の針葉樹林、冬は平地から山地の樹林に生息し、樹木の芽やつぼみ、種子、昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道、本州（中部以北）では留鳥もしくは漂鳥。四国、九州では冬鳥。

【都における生息環境】

西多摩の高標高地の針葉樹林で繁殖している。秋・冬には低山地や丘陵地の樹林に移動し、平地の公園緑地で見られることもある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすいが、生息状況については不明な点が多いため、詳細な状況の把握が望まれる。越冬地では、個体数の多い年にはサクラの花芽の食害が起これり追い払われることがあるが、一時的な給餌で被害を低減させるなど、対策をとることが望ましい。

【関連文献】

清水徹男, 2003; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



イカル

Eophona personata

スズメ目
アトリ科



【形態・生態】

体長 23 cm。成鳥は頭部が黒色で、顔や後頭から背、腰、喉から腹までは灰褐色。嘴は黄色で、太く大きい。平地から山地の落葉広葉樹林に生息し、木の実や種子を食べる。冬は暖地に移動する。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州、四国、九州では留鳥または漂鳥。

【都における生息環境】

南多摩や西多摩の自然林に周年生息し、繁殖している。冬は平地の樹林にも移動する。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

植林のための自然林の伐採などが、本種の生存を脅かす要因である。現存する生息環境を可能な限り保全することや、人工林を広葉樹林へ転換していくこと、公園緑地では、冬のごちそうとなる種子をつけるエノキ、ヌルデ、ハゼ、サクラ、カエデなどを植栽するなどの配慮が望ましい。

【関連文献】

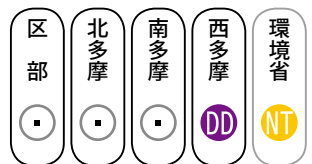
山口正信, 1981; 瑞穂町教育委員会, 1994; 八王子・日野カワセミ会, 2006. (執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



ノジコ

Emberiza sulphurata

スズメ目
ホオジロ科



【形態・生態】

体長 14 cm。雄成鳥夏羽は頭部から上尾筒までの背面が灰黄緑色で、背には黒褐色の縦斑がある。山地の樹林周辺に生息し、昆虫類や植物の種子などを食べる。渡りの時期には、平地でも見られる。繁殖はほぼ日本国内に限られる。

【分布の概要】

本州（中部以北）で夏鳥。

【都における生息環境】

西多摩の自然林で少数の生息記録があるが、繁殖については不明である。渡りの時期には、平地でも見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

生息状況について不明な点が多いため、詳細な状況の把握が望まれる。

【関連文献】

東京都公害局, 1980; 東京都環境保全局, 1997.



(執筆: 金井裕・川内博)

クロジ

*Emberiza variabilis*スズメ目
ホオジロ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
NT	NT	NT	NT	

【形態・生態】

体長 17 cm。雄成鳥夏羽は全体が灰黒色で、体下面はやや淡色。繁殖期は山地のササが茂る樹林、冬は平地から低山地の暗い樹林に生息し、植物の種子や昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州、南西諸島では冬鳥。

【都における生息環境】

西多摩の高標高地では、さえずりが確認されており、繁殖していると思われる。冬は平地から山地の雑木林などで少数が越冬している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

高標高地に生息する鳥類は生息可能域が限られているので、環境変化の影響を受けやすいが、生息状況については不明な点が多いため、詳細な状況の把握が望まれる。越冬地では、林床が茂った樹林に生息するので、下草を刈払うことや落葉を除去しないことなどの配慮が望ましい。

【関連文献】

日本野鳥の会奥多摩支部, 2001; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



コジュリン

*Emberiza yessoensis*スズメ目
ホオジロ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
DD	DD	DD	●	VU

【形態・生態】

体長 14.5 cm。雄成鳥夏羽は、頭部は黒色、背と肩羽の軸斑や翼は黒褐色。低地の湿原や山地の高原に生息し、昆虫類や植物の種子などを食べる。

【分布の概要】

本州、九州では留鳥または漂鳥。四国では冬鳥。

【都における生息環境】

河川敷や海岸の埋立地のヨシ原やオギ・ススキ草地に、秋・冬に少数渡来する。これらの場所では越冬している可能性がある。

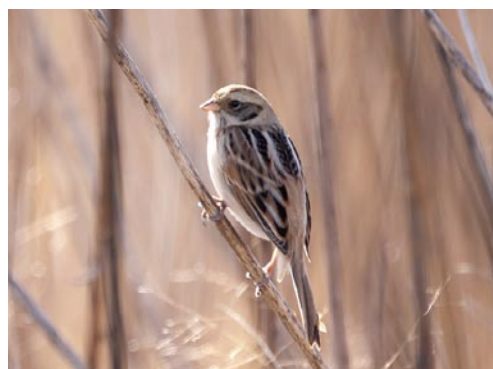
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修などによる、ヨシ原やオギ・ススキ草地の減少が、本種の生存を脅かす要因である。現存する広大なヨシ原やオギ・ススキ草地を可能な限り保全することが望ましい。

【関連文献】

八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



オオジュリン

*Emberiza schoeniclus*スズメ目
ホオジロ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
NT	NT	NT	NT	

【形態・生態】

体長 16 cm。雄成鳥夏羽は頭部、顔、喉から上胸までが黒く、体下面は白い。背面は赤褐色で黒とバフ色の縦斑がある。平地の湿原、ヨシ原、草原に生息し、植物の種子や昆虫類などを食べる。

【分布の概要】

北海道では夏鳥。本州では留鳥または漂鳥。四国、九州では冬鳥。

【都における生息環境】

大河川の河川敷や海岸の埋立地の広大なヨシ原に渡来し、越冬している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

埋立て、浚渫、河川改修、アレチウリの繁茂などによる、広大なヨシ原の減少が、本種の生存を脅かす要因である。ヨシ原が広域に現存する場所を可能な限り保全することや、必要に応じてアレチウリの繁茂の防止や除去を行うことが望ましい。

【関連文献】

津戸英守, 1984; 府中野鳥クラブ(編), 2003; 八王子・日野カワセミ会, 2006.

(執筆: 金井裕・粕谷和夫・川内博)



【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、日本鳥学会目録編集委員会 (編), 2012. 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会. に準拠した。

【備考】

和名	備考
カイツブリ	主に繁殖状況を評価した。
ダイサギ	
コサギ	
オオバン	
コチドリ	
オオタカ	
ヒメアマツバメ	
カワセミ	
ヒバリ	

【留意種とした理由】

和名	地域区分	留意種とした理由
スズガモ	区部	個体数は多いが、東京湾内では市川・船橋沖と葛西沖に集中している。特定の場所への集中は、病気の発生など生息保全上のリスクがあるので、生息場所の拡散状況や病気・事故の発生がないか留意する必要があるため。
カンムリカイツブリ	区部	かつては個体数が少なかった。近年は個体数が大きく増加しているが、大部分の個体が葛西海浜公園周辺海上に集中している。特定の場所への集中は、病気の発生など生息保全上のリスクがあるので、生息場所の拡散状況や病気・事故の発生がないか留意する必要があるため。

【関連文献】

- 赤羽根文男・鈴木弘行, 2004. 葛西の野鳥: 葛西臨海公園・葛西海浜公園鳥類目録: 10年間の記録(1994年～2003年). 自刊. 35 pp.
- 新井二郎, 1996. 裏高尾小下沢流域の野鳥. 東京都の自然, (22): 24-25.
- 府中野鳥クラブ(編), 2003. 府中市域の野鳥たち. 府中野鳥クラブ. 125 pp.
- 府中野鳥クラブ(編), 2009. 府中市域の野鳥たち 2002～2007年度特集号 2. 府中野鳥クラブ. 66 pp.
- 八王子・日野カワセミ会, 2006. 数え上げた浅川流域の野鳥 2. 八王子・日野カワセミ会. 164 pp.
- 羽村市郷土博物館(編), 1992. はむらの野鳥ガイド. 109 pp.
- 廣田行雄, 2006. 多摩川の鳥類 1996～2005年の記録. 自刊. 287 pp.
- 池谷文夫, 1990. 狭山丘陵の鳥. 日本の生物, 4(4): 22-29.
- 岩崎正義, 2009. セイタカシギの繁殖近況・東京下町. ユリカモメ, (650): 12-13.
- 金井郁夫・菱山忠三郎(編著), 1988. 八王子の季節こよみ. 八王子観光協会. 54 pp.
- 金井郁夫, 1989. ザ・高尾川(鳥と虫と獣たちの協奏曲). のんびる社. 152 pp.
- 神田忠良, 2010. 検証結果その2・東京都産鳥類に認定した鳥 ヤイロチョウ. ユリカモメ, (661): 18.
- 川内博, 1980. 東京の鳥 15. ユリカモメ, (309): 4.
- 川内博, 1981. 東京の鳥 16. ユリカモメ, (311): 5.
- 川内博, 1982. 東京の鳥 20. ユリカモメ, (315): 5.
- 川内博, 1983. 東京の鳥 40. ユリカモメ, (336): 5.
- 川内博, 1984. 東京の鳥 41. ユリカモメ, (337): 5.
- 川内博, 1997. 大都会を生きる野鳥たち. 地人書館. 245 pp.
- 川内博, 1998. いま注目の鳥 ヒメアマツバメを調べよう. ユリカモメ, (511): 18-19.
- 川内博, 2000. 都会に生息するキツツキ類. BIRDER, 14(9): 12-19.
- 川内博, 2007. 井の頭公園池のカモー 東京都三鷹市井の頭. 川内博・松田道生. とうきょうのカモたち・その1, pp. 46-49. 日本野鳥の会東京支部.
- 川内博, 2009. 武蔵野で繁殖をはじめたエナガ(6). ユリカモメ, (642): 12-13.
- 川名国男, 2006a. 人知れず滅び行く日本繁殖固有種からミゾゴイの生態(前編). 多摩の鳥, (172): 2-7.
- 川名国男, 2006b. 人知れず滅び行く日本繁殖固有種からミゾゴイの生態(後編). 多摩の鳥, (173): 2-9.
- 木村成生, 2003. 鷹ノ巣山の鳥類. 4 pp.
- 吉良幸世, 1994. 東久留米の野鳥(新版). 東久留米市教育委員会. 141 pp.
- 桑原和之, 2000. 多摩川河口域における水鳥相の解析—特に東京湾の干潟環境との対応について.(財)とうきょう環境浄化財団. 557 pp.
- 小金井自然観察会, 2000. 小金井のアオバズク—1999年の記録. 8 pp.
- 小荷田行男・浦達也・池野進・川内博・高橋邦年・若田部繁・水野敦子, 2011. 2008年度 関東地方におけるシラコバトの個体数と個体数密度. Strix, 27: 135-140.
- 小宮真治, 1988. 八王子カントリクラブ便り, (318).
- 小宮真治, 1991. 八王子カントリクラブ便り, (358).
- 増田直也, 2001. 大田区の下水処理施設屋上で繁殖したコアジサシ. ユリカモメ, (553): 19.
- 松尾武重・金井健一・猪俣資生, 1990. 多摩川でヒクイナが繁殖・・・都内での確認は20年ぶりか?. ユリカモメ, (418): 9.
- 御手洗望・荒井悦子・今井多可代・神森文代・山口孝, 2006. 青梅市「根ヶ布の森」で確認した鳥類. 青梅自然誌研究グループ会報, (1): 2-6.
- 御手洗望・荒井悦子・今井多可代・御手洗文代・三好ゆき江・山口孝, 2008. 横田基地でのコミミズク *Asio flammeus* の観察記録(その1). 青梅自然誌研究グループ会報, (3): 1-3.
- 御手洗望・荒井悦子・今井多可代・御手洗文代・三好ゆき江・山口孝, 2009. 横田基地でのコミミズク *Asio flammeus* の観察記録(その2). 青梅自然誌研究グループ会報, (4): 7-8.
- 御手洗望・山口孝・清水盛通, 2011. 八王子市におけるクマタカの繁殖記録. 八王子市史研究, (1): 150-153.
- 瑞穂自然科学同好会(編), 2006. 瑞穂の動植物. 瑞穂町教育委員会. 154 pp.
- 瑞穂町教育委員会, 1994. 鳥・みずほ. 瑞穂町教育委員会. 99 pp.
- 長野まゆみ, 1987. 小金井市貫井住宅における宮巢例. こなら, (16): 4.
- 日本野鳥の会奥多摩支部, 2001. 多摩の鳥 別冊: 支部報が記録した鳥たち 1977—1999. 日本野鳥の会奥多摩支部. 94 pp.
- 日本野鳥の会東京支部, 2003. 東京湾に飛来した標識付きヘラシギの行動. ユリカモメ, (566): 16-17.
- 日本野鳥の会東京支部, 2006. カモ類のカウントを中心とした越冬鳥調査結果. ユリカモメ, (607): 16-19.
- 日本野鳥の会東京支部, 2007. 東京湾船上調査探鳥会. ユリカモメ, (617): 13.
- 日本野鳥の会東京支部, 2008. カモ類のカウントを中心とした調査結果・その1. ユリカモメ, (631): 16-18.
- 荻野豊, 1980. 狭山丘陵の鳥. さいたま出版会. 80 pp.
- 埼玉県教育委員会, 1982. 越ヶ谷のシラコバト. 天然記念物緊急調査報告. 111 pp.
- 佐藤方博・増永望美, 2009. 孤立した小規模水域で越冬したサンカノゴイ. 生態工房調査研究報告集, (4): 25-31.
- 清水徹男, 1997. 小金井市におけるカッコウ—1996年の記録. 34 pp.
- 清水徹男, 2003. 小金井市鳥類目録・改訂第2版. 58 pp.
- 清水徹男, 2006. 北多摩住宅地の鳥たち—その移り変わりと現状. 多摩のあゆみ, (122): 18-27.
- 杉本秀樹, 2009. 三番瀬のミヤコドリ. ユリカモメ, (639): 11.
- 鈴木君子, 2007. 奥多摩湖のカモ類の生息状況. 川内博・松田道生. とうきょうのカモたち・その1, pp. 54-56. 日本野鳥の会東京支部.
- 鈴木弘行, 1994. 江戸川区の野鳥 江戸川区鳥類目録 1984～1993年. 30 pp.
- 世田谷の鳥編集委員会(編), 2009. 世田谷の鳥—世田谷鳥類目録. 212 pp.
- 高橋喜代治, 2009. 市街地の川で越冬したヒクイナ. ユリカモメ, (645): 1-2.

- 東京オオタカ連絡会, 1995. 今シーズンの西多摩および周辺地域のオオタカ繁殖結果. 東京オオタカニュース, (10): 1-5.
- 東京都環境保全局, 1997. 東京都鳥類繁殖状況調査報告書. 108 pp.
- 東京都公害局, 1975. 東京都産鳥類目録 昭和 49 年度. 223 pp.
- 東京都公害局, 1980. 東京都鳥類繁殖調査報告書. 107 pp.
- 津戸英守, 1984. 多摩川の野鳥. 講談社. 215 pp.
- 植田睦之, 1992. ツミ *Accipiter gularisa* にとって都市近郊の緑地は良い環境か?. *Strix*, 11: 137-141.
- 渡部良樹, 1997. 調布市内の多摩川におけるコアジサシの繁殖記録. *ユリカモメ*, (505): 18.
- 「野鳥と多摩川」ガイドブック制作委員会 (編), 1992. 狛江の自然 野鳥と多摩川. 東京都狛江市. 255 pp.
- 山口孝・今井多可代・御手洗望・御手洗文代, 2009. 東京都内の多摩川源流部におけるコノハズク *Otus scops* の観察記録. *青梅自然誌研究グループ会報*, (4): 6.
- 山口孝, 2008. 東京都におけるクマタカ *Spizaetus nipalensis* の繁殖記録. *青梅自然誌研究グループ会報*, (3): 9-12.
- 山口正信, 1981. 雑木林の野鳥 武蔵野の野鳥観察記. 有峰書店新社. 219 pp. + 24 pls.
- 山口貞子, 1989. 1988 年、わが町東久留米学園町でツミが繁殖. *ユリカモメ*, (399): 12-13.
- 山根茂生, 1988. ヒメアマツバメの高尾侵入と晩秋季繁殖. *URBAN BIRDS*, 5(1): 14-16.
- 吉邨隆資, 2011. 八王子市犬目の野鳥. 40 pp.